ハイスクールI×B

兵太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駒王町に住む男子高校生、上条当麻。なんの変哲も無い普通の少年はベランダに干されていた金髪の少女との出会いとともに、波乱に巻き込まれていく……

目次

邂逅 1
恵み 6
補習 10
教会 13
戦士 17
奇襲 21
陰陽 25
制圧 28
槍技 32
道程 36
閑話家 41
夏休み 45
婚約 48
宣戦布告 51
駒 57
特訓 61
調理 65
火の粉 68
洗礼 71
分散 74
電撃 77
罠 80
檻 83
決断 86

不意 ―― 89
面 ―― 95
欠損 ―― 99
龍 ―― 103
閑話―用務員 ―― 106
剣 ―― 109
出会い ―― 114
使者 ―― 116
結成 ―― 121
合流 ―― 124

邂逅

ここは駒王町。小中高一貫の巨大な学園や、立派なホテルが売りのなかなかに大きな町だ。

「……また財布落とした……不幸だ」

そんな町の十字路の真ん中、夕焼けの橙色に身体を染めながらため息を吐くのは、一人の少年。少しボリュームのある黒髪をワックスで尖らせたツンツン頭が特徴の高校一年生。

懸念だった期末考査を終え夏休みまでのカウントダウンが一ヶ月を切り、ハイテンションだった彼に水を刺すように、あるいは釘を刺すように、ちょっとした不幸が飛び込んでくるのはもはや日常的である。

少年の名は上条当麻。人よりも少し不幸体質な少年だ。財布を落とすのは月一ペースだし、人混みを歩けば誰かとぶつかるし、近道とばかりに裏路地を通れば確実にヤンチャしているお兄さんに絡まれる。それくらいには不幸な人間である。まぁ、逆に言えばそれくらいしか不幸ではないのだが……

家族構成は両親と彼の三人。しかし現在、父親は海外へと出張中で、母もそれについて行っている。彼の父の仕事は昔から何かと海外への出張が多く、母は小さい頃は上条と一緒に日本にいたが、上条が大きくなってからは彼に家を預け、父の仕事について行くようになった。

そんな不幸体質と家族の仕事以外は全く普通の男子高校生上条当麻は、交番によってから自宅に帰る。シャワーを浴びて軽い夕食を作って食べると、そのままソファーに横になって眠ってしまった――

――その夜。

ハァ、ハァと息を切らしながら、一人の少女が屋根から屋根へと家の上を移動しながら走って行く。

「どうせ逃げられないんだから、大人しくしてよねー」「怪我されるだけなら都合がいいが、死なれたらこっちも困るのだぞ」

その後ろを追う、二人の女の姿があった。ゴスロリの金髪ツインテール少女と、ボディスーツのようなピッチリとした服を着た藍色髪ポニーテールの女だ。駒王町ではこのような服装や髪色は特におかしなものでもないが、彼女らには他の者にはない物を持っていた。
烏のように真っ黒な翼。背中に生えた一対の羽が、忙しなく動いているのだ。追われる少女はその羽を視界に入れ情けない声をもらす。
そこで気が取られたのか。
少女は次の屋根を踏み損なった。
「え、きゃあああああ!?」
落ちまい落ちまいと必死に手足を動かす少女。しかしその身体は重力に従い落ちていき、
「グエッ!」
すぐにカエルの潰れたような声が聞こえた。それを聞いて羽を生やした二人は爆笑する。
「なんだそりゃ!なんて情けないんだよ聖女様!!」「言ってやるな、きっと疲れきっていたのだろう、ふふふ」
蔑むように嗤いながら二人はそちらに近づいていく。威圧するようにゆっくりと羽を進め、
「何をやっているの!?」「あらあら、烏達がこんなところでお遊戯会ですの?」「……消えてもらいます」
とそこに、新たに三人の女の子が現れた!
その少女達の背にくっついている、コウモリのような羽を見て烏羽の二人は顔を顰める。
「なっ……この領地を飛び回る蝿どもっすか!?」「三対二……不利だな。引くぞ!」
烏羽の二人は手から光の槍を出し、コウモリ羽の少女達に投げつける。少女達が避けた隙に、二人は全速力で逃げ出した。三人もすぐに態勢を立て直し、遅れて後を追う。
そして、夜が明けた――

――「……不幸だ。いや、自業自得か……」

がっくりと肩を落とすのは上条当麻。土曜日にも関わらず担任から『上条ちゃんバカだから補習でーす』とありがたいメッセージを受け取ったばかりだ。
部屋の窓を開け、外の空気を思い切り吸う。暖かい日差しを受けながら、この天気なら布団を干せると現実から逃避して、上条は早速行動に移す。
「外は良い天気なのに、お先は真っ暗……っと」
口から飛び出た言葉を噛み締め苦笑する上条は、布団を持ちベランダへ続くドアを足で開ける。
外の空気は少し湿気が多く、蒸し暑い。干し終わったらシャワーを浴びないとな、などと考えながら上条は視線を外にやる。

そして見た。
ベランダに干されている、金髪の少女を。
「あぅぅ～、この地の、方です？もし良かったら、ご飯、ほしいです……」
たどたどしいながら頑張って日本語で喋る金髪翠眼の少女を見て、上条が口に出せるのはただ一つ。
「あ、あいきゃんとすぴーくいんぐりっしゅ！」

～～～～～～
少女と話していくうちに日本語が話せると気づいた上条は、少女の要求通り食事を与えることにした。
「えっと、なんかあるかな……お、あった」
冷蔵庫を漁ると、中から菓子パンを二つほど見つけた。上条はそれを抱え、再びベランダを訪れる。金髪の少女は布団と同じようにベランダに干されていたが、上条の手に持ったパンを見て、目をキラリと輝かせた。
指を絡ませ外国語でお祈りをし始めた彼女に、
「いいからさっさと食べてくれ……ってか、まずベランダから降りた方が良いんじゃねーかな」

と声をかけると、少女も今の自分の体勢を思い出したのか、
「あ、そうですね。では失礼して……」
そう言うと少女はベランダの手すりに手をかけ、そのまま身体を後ろに持っていく。
「……って、そっちは空ちゅ「あ、いやぁ!?」っ!?掴まれ!」
に階から落ちていく少女に手を伸ばす上条。右腕はしっかりと少女の手を掴み――
――重力に従って、上条も空中に投げ出された!
「あーもーそんな気はしてたんだよ!不幸だー!」
そう言いながら、少女を抱き寄せる上条。金髪の少女が胸の中で縮こまっているのを目視しつつ、しっかりと受け身を取る。
「グエッ!」
潰れたカエルのような声を上げたが、背中から落ちたために身体への負担は幾分か和らいだ。そもそも上条にとって二階からの落下など何十回も経験しているため、ダメージの少ない落ち方も知っているのだ。
「ぐう……」
ただ、今回は少女を抱えていたため、彼女の体重ぶん身体への負担が大きかった。いつもならノーダメージだったと自負できる完璧な落ち方ではあったのだが、背中を強かに打ったため呼吸ができないほど辛い。
息ができないまま背中を抑えて転がる上条。すると庇った少女が慌てて起き上がり、背中に手を当てた。焦っていて外国語で捲し立てているため上条は言葉を理解はできないが、摩ってくれていると思うだけでも痛みが和らいでいくように感じた。事実、背中の痛みも数秒ですっと引いていった。一応受け身が取れていたようだと、上条はホッと息を吐く。
「す、すみませんでした。ありがとーございました。」
「いやいや、上条さんは人として当然のことをしたまでですよ……っと、そうだ。パン持ってきたんだよな、パン。良かったら食べなよ……あ」

パンは上条の手を離れ、いつのまにか少女の可愛らしいお尻の下に潰されていた。

恵み

涙目になりながらも潰れたパンを食べようとする少女を上条は慌てて止める。彼は少女を家の中に入れてやることにした。不審者等の危険はなさそうだと踏んでの行動だ。こんな斬新な方法を使う美人局がいるとは考えたくもなかった。

「なんかあったかなー」

上条は冷蔵庫の下の野菜室を開く。上条家の冷蔵庫の冷蔵室は基本的に調味料と飲み物の居場所である冷蔵庫なのだが、その下の野菜室の中身はパンパンである。もやしやニンジンなど、安い野菜がところ狭しと入っている。これは思春期男子高校生上条当麻がベジタリアンというわけではなく、肉を買うお金があるなら少しでも緊急用に取っておきたいという貧乏性のせいだ。

また、不幸体質への対策の一種でもある。家のローンもなく電気代や水道代、ガス代などは両親がＡＴＭで直接払っているものの、いつ仕送りできなくなったメールが来るかわからないため、また昨日のように財布をなくしたり、銀行のカードを粉砕してしまうこともよくあるので、できる限り金は取っておきたいのだ。生活代金とは別に頂いている仕送りを切り詰めている上条にとって、肉というのはなかなか手に取れないものだった。

「余り物で悪いけど、食べてくれ。あ、日本食は大丈夫か？」

少女の前に置いたのは、もやし炒めと白米、インスタントの味噌汁。上条の朝食だ。朝は大体これかスクランブルエッグが並ぶ。

「大丈夫、です。とても美味しいそうです」

少女はそう言うと両手の指を交互に握るようにして手を重ね、外国語を発する。何と言っているかは到底理解できないが、食前のお祈りをしているのかな、と言うことだけは馬鹿な上条にもわかった。

食事のお祈りが済むと、少女はスプーンとフォークを握る。フォークで器用にもやしを掬うと、パクッと一口。

「！……美味しい、です！」

そう言って微笑んでくれる少女に、上条も破顔してしまう。

少女はフォークとスプーンを品良く動かし、その手は食事が終わるまで止まらなかった。食後のお祈りをし、その間に上条が入れたお茶を飲んでほっと一息ついた少女は口を開く。
「ご好意ありがとうございます。私は、イギリス清教のアーシア・アルジェントです。今回、教会の手助けと布教のため、日本に来ました。日本語も勉強しました。伝わってますか？」
「ちゃんとわかってるよ。ていうか俺、日本語しかわからないし」
「母国語を大切にされているのですね！」
「あー……そうとも言えるかもな」
少女…アーシアのポジティブな解釈を上条は受け取っておく。何も自分から評価を落とすことはあるまい。
それにしても、と上条は考える。
（彼女はシスターさんか……なるほど、そう言われれば確かに服もそれっぽいし、胸には小さな十字架ぶら下げてるな）
アーシアのたわわな胸の上にちょこんと置かれるような形で、銀の十字架が淡く光っている。十字教のシンボルだ。
「で、そんなシスターさんが何故私の家のベランダに引っかかってらっしゃったのでせうか？」
「はうぁっ!?」
ビックゥゥゥウウ!!とアーシアが過敏に反応する。聞かれたくない話題なのかもしれないが、上条としては聞かねばならない。
彼女は目を逸らし、人差し指を突き合わせて口を紡ぐが、上条がじっと見つめ続けると段々と冷や汗をかき出した。そして一分ほど経っただろうか、ついにアーシアは観念して口を開いた。
「あまり一般の方々には言うなといわれているので、この事は内緒にしてくださいね。
私は今、堕天使に追われているのです」
「だてんし？」
「堕天使というのは、聖書などで出てくる天使の中で、何らかの罪を犯して追放された方々の事を言います。有名どころで言えばアザゼル

総督などですね」
　上条はさらに喋ろうとするアーシアを制止し、尋ねる。
「天使？堕天使？はぁ、なんじゃそりゃあ！ありえねえっ！ここは創作の世界じゃない！そんな奴らがいるわけない！」
「いるんです」
　アーシアはまっすぐ、上条の目を見て言った。断言した。
「天使も堕天使も、悪魔も魔法使いも、吸血鬼も妖怪も、そして主もこの世には存在します」
　唖然とする。言葉が出ない。何を言っているか言葉では理解できた。それでも理解したくなかった。
「な、何か証拠とかないのか？何もないんじゃ信じられないぜ、そんな非科学的なもの……」
「今挙げたような大勢の種族、その中でも人間は最も弱い生き物だと言われています。我らが崇める主はそれを憐れみ、人間にある力をくださいました。私もそれを持っています」
　アーシアの両手が、緑色に淡く光る。
「神器（セイクリッド・ギア）。神が伝えた異能の力です。人によってその力も異なるのですが……私の神器は聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）みと言って、他者を回復させることができます。先程私を庇っていただいた時の怪我も、この神器で治させていただきました」
　先程の落下を思い出す。猛烈な痛みがスッと引いていったのは、身体が痩せ我慢しているのかと思ったが、そうではなかったらしい。
「……動物も植物もいろんな種類がある世界だし、天使や堕天使がいる事は信じるよ。そのなんとかギアも見せてもらったし。それで、なんでそんなアンタが堕天使に追われるハメになったんだ？しかもこんな街で」
　アーシアは目線を下にやると、自分の胸元にある十字架を小指で撫でた。
「彼女達は、私の神器を狙っているのです。この神器があれば、更なる高みにたどり着ける、と……」
　高み……上条がそれについて考える前に、家の固定電話から無機質

な音が流れる。それは上条が受話器を取る数秒前に鳴り止み、代わりに電話機から担任教師のあどけない声が聞こえてきた。
『上条ちゃ～ん？またお昼寝中ですか？それとも厄介ごとですか？上条ちゃんには絶対に来てほしかったのですけど、来れないなら来れないで連絡を入れてくれないと、先生困ります！これを聞いたら、返信をくださいねー！』
「……」
やっべー忘れてたー!!と上条は頭を抱える。そういえば今日は担任直々に補習授業をしていただけるありがたい日だった、と上条は思い出す。
しかし、このままアーシアを置いていくわけにもいかない。彼女を放り出してまた堕天使に襲われたりしたら、それこそ後悔しかねない。
では学校を休む？それはダメだ。上条当麻は馬鹿である。このままでは留年、下手したら退学の危機である。担任の好意を踏みにじるような真似は、自殺行為そのものである。
となると……仕方がない。折衷案である。
上条は今日使うであろう教材を素早く学生鞄に入れると、アーシアの前に右手を差し出す。
「……？」
アーシアはその手を見て、自分の手を重ねた。
その手を上条は引っ張って立たせると、玄関に向かって走り出す！
「え、ええ!?なんですかツンツンさん!?私はなぜ引っ張られてるんですか!?」
「ツンツンさんじゃありません上条当麻と申します！ちょっと用事があったけどこのまま放置もできないから、シスターさんにはこのままついてきてもらいますのことよー!!」
うわはははは―！と笑う上条とあーれーと連行されるアーシア。これが時代劇なら颯爽とお偉いさんが現れバッサバッサと敵をなぎ倒す展開なのだが、ここは江戸時代ではない。周囲の者達も二人の笑顔を見て、ふざけているだけだと結論付けたのだ。

補習

高校に辿り着いた頃には二人とも息が切れていた。上条はアーシアを引っ張るのにも体力を使っていたし、アーシアはそもそも長距離を今まで走ったことはなかったのだ。途中で転んだりもして、普段の上条なら五分で着ける距離を今日は三倍近くかけてしまった。

ここは駒王町にある公立の高校である。駒王町には駒王学園という地方でも有数な高校があるが、その門はかなり狭い。駒王学園に入れなかった駒王町の中学生はここに来るものが多い（もちろん、最初からこの学校狙いで必死に勉強してギリギリで合格した上条当麻のような人間も多くいるが）

そんな下の下レベルの上条が教室に入ると、幼い声が出迎えてくれた。

「上条ちゃーん？もう授業は始まっていますよ？一年生から遅刻癖をつけるのは先生感心しないのです」

その幼い声に見合うような小さな体躯をしているロリ教師が、上条の担任月詠小萌（つくよみこもえ）先生である。上条はすいませんでしたー！と全力で謝ると、追い討ちをかけるようにクラス前方から二人の男子が声を上げる。

「おいおい上やん十分の遅刻だぜぃ？上やんが遅刻すると俺達まで巻き添え食らうんだからやめて欲しいにゃー」

「僕はそれならむしろウェルカムやけど、小萌ちゃんの授業に遅刻するとは、いつもながら贅沢な人生送っとるなあ上やんは」

「うるせー土御門に青ピ。俺にもちょっと事情があったんだよ！」

服装や髪型に関しては割とフリーダムな校風のこの学校の中でもなかなか異質なのが、この二人。金髪グラサンの土御門元春（つちみかどもとはる）と青髪に小さな耳ピアスをつけている藍花悦（あいはなえつ）、通称青髪ピアス。二人ともニヤニヤと上条を見ていたが、彼が手を引いている金髪翠眼のシスターさんを目にすると、態度を変えた。

「上やんまた女の子口説いてきたんかぁ！今度という今度は許さへんで！」「毎回わざわざ俺達に見せつけやがって！嫌味かてめぇ！」

「待てってこれには理由があるんだって！ていうかいつも口説いたりしてねーし！駒王学園の奴が絡んでくるだけだし！」
上条当麻は不幸故に不良に絡まれることもよくある。駒王町にも不良と呼ばれる類の人間は多くいるのだ。そのため少しは喧嘩慣れもしている。
ただ、駒王学園の生徒に喧嘩を売られるのは何故なのだろうか。しかも女子に、よくわからない理由で。
生体電気がどうだとか気の流れがどうだとか知らねーし！と上条は彼女達から逃げ続けているのだが、そこをたまにこの二人に目撃されてしまうのだ。代われるものなら代わってやりたい、と上条は思っている。
（それに比べてアーシアのなんと静かな事か……）
アーシアに後光が差しているように錯覚した上条であった。
「上条ちゃん、そちらの方はどうされたのですか？学校に生徒と教師以外が入ってくる場合は許可証が必要になるのですよ」
ここで口を挟んだのが小萌先生だった。どうやら規則違反をしたらしいと気づいた上条は、それでも一応言い訳をしておく。
「今日は土曜日だから、学校の敷地内に部外者が入っても問題ないんじゃないんですか？」
「それは敷地内の話であって、校舎内ではないのです！」
そう言われたがまだ入学して2ヶ月ほどの上条には、許可証の取り方がわからない。それを言うと小萌先生はそれもそうですねと納得する。
「では申請のやり方を教えますので、上条ちゃん……とついでに二人もついてきてくださいー」

〜〜〜〜〜〜〜

何事もなく立ち入り許可証を手に入れる事ができたので、上条達は教室に戻る。本来の開始時間から大幅に遅れて補習が始まった。上条は宿題が倍になってしまったが、アーシアの無事と比べれば安いものだと泣く泣くそれを受け取った。

化学の方式やら科学の公式やらを詰め込まれ、上条の頭がパンク寸前になったところで授業が終わる。一ミリも分からなかった用語が少し理解できるようになっただけでも有意義なものだっただろう、と上条は自画自賛した。

「お疲れ様です。お帰りになりますか？」

アーシアの笑顔からも、補習をやりきったのだと達成感を感じる。上条は頷いたのだが……

「あー、ちょっといいか？上やんじゃなくて、そこのシスターさん？ちょっと用事があるんだにゃー」

ここでこちらを呼び止めたのは金髪グラサン。青髪ピアスが「わいもわいもー」と言ってくるので、上条は丁重にお断りしようとする。が。

「私は構いませんよ。むしろ日本で知り合いが増えるのは、大歓迎です！」

という言葉に、許可を出すことにした。事情は教えないまでも、教会の仲間とやらが来るまでアーシアを見守ってくれる知り合いがいてくれた方が心強い。

話はどちらも数分で済んだようで、帰ってきたアーシアは「有意義な時間でした」とだけ告げた。何か変な事をされていないか少し心配だった上条が話の内容を聞いてみたが、アーシアは答えなかった。上条は話を変えてみる。

「ところで、教会にはいつ行くんだ？お仲間が待ってるんだろ？」

「あ……はい。この町の端の方に、古い教会があるそうで、そちらの方から呼ばれているのです。本来なら今日にでも訪れたかったのですが、急なハプニングがありましたので、明日にでも……」

「じゃあ今日はどうするんだ？」

その言葉にハッとするアーシア。どうやら何も考えていなかったようだった。上条もそれは同じだったので、アーシアに聞く。

「今日は泊まってくか？」

その誘いを受けたアーシアは、笑顔で「はい！」と頷いた。

教会

翌日、上条当麻とアーシアは駒王町の端っこにポツンと建った古い教会を訪れていた。

「ここに教会の人なんているのか？見たことないけど」

中学生になり引っ越してきて駒王（くおう）町を探索した上条だったが、その時からこの教会も寂れている。人がいるところなんて上条のクラスメイトに聞いても誰も見たことがないだろう。

その旨をアーシアに話すが、構わず彼女は分厚い木の扉を叩いた。数秒経って、戸が開く。本当に中に人がいたと上条は驚いた。

中から出てきたのは、黒い修道服に身を包んだ整った顔立ちの銀髪の青年。恐らく同じくらいの歳だと上条は推測する。その男は柔らかく微笑むと、口を開いた。

「君がアーシア・アルジェントさんだね？僕ち……僕はこの地で教会を守護している戦士、フリード・セルゼンです。長旅ご苦労だったね、中に入って休むといい」

言ってアーシアを教会の中に入れながら、フリード神父は懐から銀色の筒のようなものを取り出した。懐中電灯かなにかだろうかと上条は見た目で判断する。しかし一体この昼間になぜ？その疑問はすぐに霧消した。

その筒から光が飛び出す。光は一瞬で形が固定されて、有名なＳＦ映画の光る剣のようになった。所々ブレながらも光の塊は上条の方へと振り下ろされ。

上条の掲げた右手に当たって、粉々に粉砕された。

「あ？」

光の剣の持ち主、フリード・セルゼンは疑問の声を上げる。確実に取ったと思った男の首がまだ胴と繋がっていることにでもあり、その男によって光が分散されたことにでもあった。

そして、疑問なのは上条も同様だった。

「……一体何をなさるのでせうか？というか今のは何？」

何か隠し球があったらしいと、フリードは大きく舌打ちする。何が

起きたか把握できていないアーシアを無視して、フリードは上を見上げた。
「……ドーナシーク!!」
フリード神父が天に向かって大きな声を上げる。すると、教会の上から一人の男が現れた！
帽子とトレンチングコートに身を包んだ髭面の男。その男の背中には、大きくて黒い鴉のような一対の羽がついていた。上条は昨日の話から彼の、いや、これの正体に気がつく。
「堕天使……!?」
「む？この羽根から気づいたな？……さてはハエどもか、教会の関係者か？面倒だな。だからあの二人には独断先行をやめろと言っていたのだがな」
堕天使は手のひらから光を生み出すと、槍状に変形させた。こちらに向かって先端を構える。上条もそれを見て身構えたが、後ろでフリードが奇声をあげた。
「も～しもしおぼっちゃん？上条さん家の当麻クン？そっちの注意をするのもいいけど、お友達のアーシアちゃんを忘れちゃいけませんなぁ！この薄情者！人でなし！まさに悪魔！」
「アーシア！」
振り向くと、フリードに銃口を突きつけられたアーシアが、泣きそうな顔でこちらを覗いていた。
「てめぇ……！」
「あっらー？怒った？オコなの？アーシアちゃん人質に取られて怒ってる？でもそれもこれもお前さんが目ぇ離してるのが悪いのよ？むしろ、背中から銃撃ちまくっても良かったのにこうしてアーシアちゃんと末期の話をさせてあげる僕ちゃんの優しさを称えてちょ！」
パンパン！とフリードは上空に向けて二回、発砲する。小さな光の銃弾が高速で飛んでいくのがわずかに一瞬見えた。先程の光の剣と同じように、光の銃弾を扱えるらしい。
「改めて、俺の名前はフリード・セルゼン！とある悪魔祓い（エクソシスト）組織に所属している末端でございます。そっちの髭面はドーナシーク。今の俺

の上司様で、君の介錯人でござんす」
　見ると、ドーナシークというらしい堕天使は、ジワジワと近づいてきている。一気に来ないのは、さっき起こった光が消えた現象に警戒してだろうか？
　上条自身も先程の光剣が消えたトリックは理解できていないが、そんなことは今はどうだっていい。今上条がやらなければいけないのは二つ。アーシアを助け、悪魔祓いと堕天使を撒く！
「上条さん、逃げてください！私は大丈夫ですから！早く！」
「動いちゃやーよ、上条ちゃん♪動いた瞬間この子の頭もパーン！なんてことになっちゃうＺＥ！」
（八方塞がりだ。このまま動かなければ俺は死ぬ！さっき光が消えた理由はわからないが、また消える保証はない！だけど俺が逃げたら、アーシアが……）
　ドーナシークが槍の範囲までたどり着いた。もう逃れる事は出来ない。上条は目を瞑り……

「ごっ……がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!?」
　声を上げたのは、上条ではない。ドーナシークが上条のさらに後ろを凝視する。
　フリード・セルゼンの両手に、黒い何かが巻きついていた。フリードの物ではないし、アーシアが出した魔力でもない。攻撃の魔力が使えないのは、すでに調査済みだ。
（ならばこの少年か？……!?）
　手の触感がフッ、と消えた。
「お前らが堕天使でも悪魔祓いでもなんでもいい。お前達が何をしたいかなんて知ったこっちゃない。
　アーシアは誰にでも優しく出来るような子だ。すぐに皆と仲良くなれる子だ。そんなアーシアがこんな何もわからない日本に来させて、一晩中追いかけ回されて、そして今銃を付けつけられてる。そんなのが許されていいのか？いい訳ない！だから俺はお前をぶん殴って、フリードをぶん殴って、アーシアを連れて帰る！」

大きく振りかぶった渾身の拳が、ドーナシークの顔に飛ぶ。頬を殴り抜けられたドーナシークは後ろに飛び、二、三度バウンドしてダウンした。
「クソったれ野郎がぁああ!!」
フリードが何かに巻かれた腕を無理やり動かし、光弾を上条に向けて連射した！
上条は右手を出してそれらを全て消し飛ばすと、フリードの懐に入る。
「ちょ待っ」
よく動く下顎に向かって、全力でアッパーを喰らわせた！
フリードがどうなるかも見ずに、上条はアーシアを脇に抱えると教会の敷地を飛び出す。昼間だから追って来ないだろうと、必死に街中へ向かって走る。
（あっちは恐らく俺の家を把握してる！ここは誰か他の奴のところに逃げなきゃ！）

～～～～～～～

走っていく上条。その背中を、教会の更に奥にある林の木の上から眺めている者がいた。
「二人とも無事、か。一先ずは安心だな。彼女から今日ここに来ると聞いていてよかった。
さて、そろそろ上やんが電話かけてくる頃かにゃー？」

戦士

上条家と同じ通りにある階層の高いアパート。そこに上条は突入した。エレベーターが来ると中で四階のボタンを連打する。堕天使は追ってこなかったようで、影も形も見えない。途中で携帯を落として粉砕する不幸はあったものの、どうにかここまでたどり着けたと安堵する上条の腕を、アーシアがタップする。気絶していたアーシアは上条が抱えて走っている途中で意識が戻ったのだが、彼女に走らせたらスピードダウンになると判断した上条によって抱えられたままだったのだ。

「あ!?悪いアーシア!すぐ下ろすから!」

屈んでアーシアの足を地面につけ、手を離す。アーシアは上半身を立たせようとするが、そこでエレベーターが四階に到着した。エレベーターが止まり、その反動で揺れる。

「きゃあっ!?」「アーシぶぁ!?」

まだ完全に立っていなかったアーシアはバランスを崩し、上条を巻き込んで転倒する。それとともに出口のドアがゆっくりと開いた。

「……何してるんだー?上条当麻。エレベーターだって家の一部だってこと自覚してほしいんだけどなー」

ドアの先にいるのは、メイド服（萌え的な物ではなく本格的な地味なもの）を身体に纏った少女だ。土御門の義妹、土御門舞夏（まいか）である。

上条の上で赤くなっているアーシアを引っ張り起こし、舞夏は来た道を戻る。アーシアは早足でついて行き、上条は後ろを警戒しながらその後に続いた。

土御門家の部屋にお邪魔すると、玄関にある大きな亀のぬいぐるみが出迎えた。昼食に味噌汁を作っている途中だったのか、家庭的な匂いが部屋に充満していた。

「兄貴がもうすぐ帰ってくるから、それまで昼食を摘んでるといいぞー。どうせ上条当麻のことだから、昼は食べてないかカップ麺生活だろー?」

実際先週は昼食代わりに水を胃に入れていた上条は何も言い返すことができない。ここはありがたく好意に甘える事にした。
味噌汁の他に卵焼きと生姜焼きに漬物がついた、定食のようなご飯が上条達の前に出される。どれも湯気が立っており、見た目だけでも食欲を湧き立たせる。生姜焼きの豚肉を口の中に入れると、野菜炒めにはない弾力とともに、自家製タレと生姜の和風なハーモニーが口の中に広がる。家政婦の職業学校に通っている土御門舞夏の料理は絶品だ。隣に座っているアーシアも、ふわふわの卵焼きを絶賛する。
二人が昼食を完食したタイミングで、玄関のドアが再び開いた。外から金髪グラサンがニヤニヤした顔で現れた。
「おいっす上やん、また厄介ごとにっておぉい!?舞夏の昼食を勝手に俺より先に食べるんじゃねぇ!」
「出されたら冷める前に食べるのがマナーってもんだろ」
帰ってきた言葉に言い返せない土御門はキッチンで味噌汁を温めなおしている義妹に白米を大盛でと注文すると、座布団を床に敷いてドカッと座った。少しして食事が持って来られると、卵焼きを一口で食べ終えた。
「それで、急にウチに来たのはどういう案件なんだ?しかも今日は泊めて欲しいって、自給自足がモットーの上やんにしては珍しいにゃー」
「えっと、今日の食料がなくなっちゃって。昨日アーシアのために奮発して作りすぎちゃったから……」
「おいおい上やん、親友に対して嘘をつくのはどうかと思うぜぃ?」
土御門はクツクツと笑う。顔に出ていたか、と上条は頬を撫でるのを見て、土御門は更に一言を付け加えた。
「堕天使に追われてるんだってな。今朝襲われたって?」
上条の血の気が引いた。
「お前、それをどこから……!?」
横目でアーシアを見ると、彼女はさほど動揺していない。となると

アーシアは、土御門が堕天使を知っていることを知っていたのか？上条は考えた末にある結論が思い浮かぶ。
「教会の戦士……」
「ご名答だ、上やん」
　土御門は胸元に手を入れると、ネックレスを取り出す。ネックレスの先についているのは、十字架。十字教のシンボルだ。
「この町は結構なパワースポットでな。教会も……十字教もここにノータッチって訳にはいかないんで、信用の厚い俺を派遣したんだにゃー」
　土御門のサングラスがキラリと光って見えた。
「信用厚い……って本当か？どこから見ても胡散臭いんだが」
「酷いこと言ってくれるにゃー。ま、信用厚いってのは嘘だけど」
「親友に嘘を云々は何だったんだよ!?」
「知ってるか、上やん？俺って実は、天邪鬼（つき）なんだぜい？」
　土御門のドヤ顔に一発入れようと殴りつけるが、その拳は戦士の掌に遮られた。
「今回アーシアがイギリスから持ってきた仕事はこの町の教会の視察、及び清掃だ。今あそこは悪い堕天使とその傘下に支配されていて、面倒な状況になってる。俺はまだ見てても良かったんだが、とっとと追い出せって催促されてるようだからにゃー。今晩にでもあいつらをぶっ倒しに行って来るぜい」
「だ、大丈夫なのかよ土御門!?奴らは光を剣や銃や槍にして攻撃してくるんだ！理屈はよくわからないけど、危険だぞ！」
　上条の心配を、土御門は笑う。
「教会の戦士ってのは堕天使や吸血鬼なんかの異生物を敵として戦ってるんだぜい？そこらの対策はちゃんと行ってる、心配すんな」
　土御門はそういうと、味噌汁を啜った。
「……もう冷めてるか」

　～～～～～～
「もしもし、俺だ」

昼食後、菓子でも買って来ると言って土御門は外に出た。持っている携帯から電話帳を開き、目当ての番号を探して電話をかける。相手はすぐに反応した。

「今日には例の教会を攻める。手伝ってくれるとありがたいんだが……本来ならそっちの管轄のところを、俺達が掃除してやるんだぞ、援軍の一人や二人、寄越したらどうだ。

……ああ、それで十分だ。感謝する。じゃあ夜にな、魔王の妹さん」

土御門はニヤリと笑うと、電源を切った。

奇襲

夜、土御門が約束した場所に着くと、一組の男女がそこにいた。男の方は金髪の優男で、木に寄りかかって西洋風の剣を磨いている絵が様になっている。白髪の小さな女の方は、真新しい切株の上で座禅を組んでいた。

「よお、ご両人。調子はどうだ？」

土御門が声をかけると、二人とも彼の方を向く。男の方が土御門に応じた。

「やぁ、ツッチー君。こっちは万全の準備をして来たところだよ。君にも一つ、剣を渡しておくよ」

そういって男は土御門の足元に剣を投げる。土御門はそれを拾うと、付いた砂を払った。漆黒に染まった刃が薄っすら揺らめくように見えた。

「『光喰剣（ホーリー・イレイザー）』か。また器用に造ったものだな、木場」

「少し時間をかけたからね。量も増やしたし」

男……木場が微笑むと、土御門も笑った。

彼、木場祐斗（きばゆうと）。そしてもう一人の彼女、塔城小猫（とうじょうこねこ）。彼らはこの街を支配する悪魔、グレモリーの眷属たる悪魔なのである。

この街、駒王町は実は代々悪魔であるグレモリー家が裏で支配している。支配、といっても金や物品を徴収したりはせず、むしろ他の悪魔や堕天使などから駒王町を守る、自警団のような扱いだ。そのグレモリー家の長女であり、この町で暮らしている悪魔リアス・グレモリーの眷属の代表として、今回二人が派遣されたのだ。

「いやー、しかし気心知れた木場きゅん先輩で良かったにゃー。これがお堅い部長様やねーちん達や小猫ちゃんだけだったら、作戦会議だけで朝になってるところだぜぃ」

「……私はここにいるんだけど。目の前で侮辱されて良い気はしない」

小猫が目を開き、立ち上がる。その手はがっちりと握られていた。

「にゃー!?集中してて聞こえないと思ってたのに！まぁまぁこんな時

こそリラックスしてほしいにゃー！」
「そのニャーニャー言うのも不快です。私を馬鹿にしてるの……？」
小猫は土御門の方に突撃する。土御門が余裕を持って横に避けると、小猫はそのまま土御門の背後の茂みに突っ込んだ。茂みの中から軽い悲鳴が上がる。十数秒ほど経って小猫が次に立ち上がった時、その片手が一人の男子の襟首をつかんでいた。我らが主人公、上条当麻である。
「……どこから気づいていたんでせうか？」
「「最初から」」
上条は観念して両手を上げた。
「彼は誰だい？」
木場が土御門に尋ねる。
「上条当麻（かみじょうとうま）。俺の親友の一人にして、アーシア・アルジェントの保護者ですたい。こっちの事情もいろいろと知ってるにゃー。というかアーシアが全部喋った」
「か、上条当麻です。以後よろしく」
会釈する上条を小猫は地面に放り投げると、顔を近づけて説教を始めた。
「何やってるの？私達は遊びに行くわけじゃない。いつもあなたとやってる喧嘩とは訳が違う」
「そんなことわかってる！俺だって何の対策もせずにここに来た訳じゃないんだ！っていうかいつもの喧嘩ってお前がただ追いかけて来てるだけだろ！」
ヒートアップしてきた二人を木場が静止する。
「落ち着いて二人とも。彼は彼なりに何か堕天使への対策を取っているはずだ。そうだろう？」
「そういえば、悪魔祓（エクソシスト）いの光の剣や堕天使の光の槍を消したって報告を受けたにゃー。それと関係があるのか？」
お膳立てを受けた上条は、右手を前に掲げる。
「俺の右手……右手首から上は、堕天使の光の攻撃を無効にする。フリードの攻撃も、堕天使の攻撃も、俺は右手で打ち消した。神器もそ

うだ。右手首より上だけ、アーシアの『聖母の微笑み(トワイライト・ヒーリング)』の効果を弾いた。多分他の神器でも打ち消せる」
「光の攻撃……つまり魔力や、神器の攻撃を無効化したのか。そういう神器は聞いたことがない」
「俺の魔法も消されちまいそうだにゃー。上やんの右手は能力殺しであり能力者殺しだぜぃ。神器と仮定して名付けるとしたら、異能殺し(アブノーマルキラー)……いや、魔力や神器なんて一般人から見たら幻想的な物を殺す、さしずめ『幻想殺し(イマジンブレイカー)』ってところかにゃー?」
「『幻想殺し(イマジンブレイカー)』……」
どこか懐かしいような響きで、妙にしっくりくるように思えた。上条は右手を見つめ、握り開きを繰り返す。
「なるほど、それは戦力になりそうだ。知識もあるし、彼にも手伝ってもらおうか、小猫ちゃん」
「反対です。実戦経験がなさすぎます。堕天使から逃げだせたのもたまたまでしょうし、今日ついて行っても逃げ続けるか殺されるかです」
「実戦経験なんて最初は誰も持ってないもんだ。それをここで得られるのはむしろ好都合ってもんだ。こっちが仕掛けること、光を無力化出来ること、いざとなれば応援を呼べること。これらを加味すると今日の仕事はイージーモードだし、どうせなら上やんの経験値稼ぎにするのが一番いい」
二人に言いくるめられて、小猫は黙る。それを見て上条は、改めて拳を強く握った。

〜〜〜〜〜〜〜

木場が一階の窓ガラスを四分割して外に放ると、四人はそこから侵入した。神父が何人かいたが、気絶させる。
部屋についているドアを開くと短い廊下がある。左は出入口、右は聖堂だ。先に出入口の扉に敵がいないか確認してから、一気に聖堂へ足を踏み入れた。

中には長椅子と祭壇があり、ロウソクと電気の灯りが薄暗く部屋を照らしていた。
「あらあらこれはこれは、上条当麻君ではあ～りませんか」
部屋の隅、太い柱の影から現れたのはフリード・セルゼン。悪魔祓いは光の剣を両手で構えると、下卑た笑みを作る。
「何をしたかは知らなッチャブルだけど、俺達としてはここに堕天使のとっつぁん方がいるのを知られるのはまずい訳だから、残念ながら上条ちゃんはボッシュートでーす。二体も居やがるクソったれ悪魔はまとめてバラして金髪グラサンは顔がムカつくってことで蒸し焼きにして、全員まとめてこの俺が地獄に連れて行ってあげちゃう！」
フリードの突撃に対し、木場が驚異の速度で上条達の前に立つ。フリードの剣と木場の剣が衝突する！
と同時に、光の剣が揺らぐ！だんだんと木場の剣に光が吸い取られていっているようで、剣はその形すら保てない。
「しゃらくせぇ！こうなりゃ全員蜂の巣よ！」
剣を放棄したフリードは懐から銃を取り出す。光の弾丸が一気に木場に放たれる。

しかしその弾丸は、パキィィイイイン!!という音とともに弾け飛んだ。
「そんな幻想はおれが殺してやる！今だ！」
上条当麻の頭上を飛び越え、塔城小猫がフリードの顔面を捉えた！右頬に入った拳は全力で振り抜かれ、フリードは聖堂に飾られた十字架に激突するとそれをも叩き割り、教会の壁まで吹き飛ばされた！

陰陽

不良神父を吹き飛ばした上条は、フリードがダウンしている近くの床に、一つの複雑な絵があるのに気がついた。円の中によくわからない文字や記号が印されたそれは絵具などで描かれたものではないようで、所々が移動したり消えたり浮かんだりしていた。
「魔法陣だ。おそらく何かを隠してるんだろうぜ。触ってみな、上やん」
言われて上条が右手で触れると、魔法陣は粉々に砕け、その下から地下に続いているであろう階段が現れた。
「私がまず行きます」
小猫がそう言って真っ先に階段の中に入っていく。上条もその背中を追ってゆっくりと下に降りていく。
「じゃあ、次は僕が……っ！」
次に階段に足を掛けた木場だったが、急にその場で光喰剣を抜き一閃する！光を吸う音と金属がぶつかる音が同時に響いた。
「ひゅー、さすがは僕ちんをぶっ飛ばしてくれただけはありますなぁ……」
声のした方に振り返る。そこには座ったまま両手に拳銃を構えたフリードの姿があった。彼は拳銃をさらに発砲しつつ、足の力で立ち上がる。
「お礼と記念に、お前を殺すのは最後にしてやるよ……何つって！そんなわけねーじゃん！みんなまとめて瞬コロだっつーの!!」
言葉と共に飛んでくる弾丸、それらを剣さばきで弾いていく木場。その後ろから土御門も拳銃で応戦するが、フリードは先ほどのダウンは何処へやら、高速で軽々とそれらを避ける。
「さっき喰らったのは騙しよ騙し！お前らみたいに多数で攻撃かましてきたときの対処法ってやつ？二分割してぇ……確実に殺す!!」
言うと同時に二丁の拳銃から弾丸をタイミングをずらしてばら撒くフリード。木場も落ち着いてはいられず、全力で一手一手に対処する。

が。
不意に、その身体に光の矢が迫る!!
「おいおい、土御門さんを舐めてもらっちゃ困るぜぃ。こんな攻撃なんて奇襲にもなってないぜ」
土御門が受け取った剣で光を吸い、木場をフォローする。そのまま光の飛んできた先、廊下の近くにある太い柱の上に向かって挑発すると三人の男女が姿を現わした。背中には一対の翼。堕天使だ。その中には一度上条と見(まみ)えた、ドーナシークの姿もある。
「ほざけ、人間風情が」
ボディスーツのようなピッチリとしたスーツを着た女が話すと、ゴスロリ金髪幼女とドーナシークもそれに追随する。
「お前らの方こそ、こっちがわざわざ逃してやったその日に攻撃して来るとか、見え見えっすよ!こっちは奇襲対策も万全!」
「この聖堂では我々三人とそこのはぐれ悪魔祓いが貴様らを仕留め、下ではレイナーレ様と信者どもがお仲間を血祭りにあげる。もうお前達に希望はないぞ」
「それはどうかにゃー?」
言いながら土御門は札付きのフィルムケースを双方にポイっと投げ捨てた。
爆発物かと思って離れるフリード。それとは反対に撃ち落そうと光の槍を投げつける堕天使達だったが、槍は木場の投げた光喰剣の一本に吸われて進路を変えられ、ケースには当たらなかった。
箱は地面に激突する。しかし、何かが起こる様子はない。そうしているうちに土御門は他にもフィルムケースを二つ取り出し、誰もいない二箇所の壁際にも放り投げた。四つのケースが正方形になるような形でばら撒かれたのを確認して、土御門は立っている場所に木場から受け取った剣を突き刺した。そして、仰々しく咳払いをする。
「―　―　場ヲ区切ル事。紙ノ吹雪ヲ用イ現世ノ穢レヲ祓エ清メ禊ヲ通シ場ヲ制定」
さらに懐から取り出したるは黄色いフィルムケース。その中から

小さく四角に切り取られた紙が舞い上がる。
「――界ヲ結ブ事。四方ヲ固メ四封ヲ配シ至宝ヲ得ン」
聖堂の空気が凍りつく。堕天使はその圧に目を見開いた。焦りから行おうとする突撃は、しかし悪魔に遮られる。木場が三人のバラバラな攻撃を、それぞれ対処する。ドーナシークがフリードの方を向いたが、彼はすでにこの場にいなかった。
「――折紙ヲ重ネ降リ神トシ式ノ寄ル辺ト為ス。
四獣二命ヲ。北ノ黒式、西ノ白式、南ノ赤式、東の青式」
土御門の言葉に呼応するように、先ほど放り投げたフィルムケースが輝き始める。北は薄暗い教会の壁よりも真っ黒に、西は対照的に真っ白に、南は派手派手しく真っ赤に、そして東は堕天使達の顔以上に真っ青に。
「黒キ色ハ水ノ象徴。其ノ暴力ヲ以テ道ヲ開ケ!!」
詠唱完了と共に、土御門が突き刺した剣から、大量の水が溢れ出す！黒く透き通った水流が、塊となって堕天使に発射された!!
「何!?まずい、抑え込めん……
ごっ、がぁぁぁぁぁぁ!?!?」
ガードとして出していた光の壁も突き破り、水流は堕天使達を呑み込んだ。
水は聖堂内を暴れ回り、土御門達の足下に来てやっと消滅した。残った堕天使達は気絶している。
自分の仕事が片付いた土御門は木場の方を向く。彼は肩を竦めている。土御門は遅れて、フリードがいないのに気づいた。
「君の魔法を察知したのか、目眩しを使って逃走されちゃってね。申し訳ない」
「いいさ、あれは下っ端だ。それよりこいつらを捕らえられたことが大きい」
言いながら、剣と魔法で堕天使達を縛る二人は階段を見下ろす。
「上やんは大丈夫かにゃー？死んではないと思うけど」
「小猫ちゃんが少しでもフォローしてくれてるといいんだけどね」
言いながら、二人も地下への入り口に足をかけた。

制圧

時は数分遡る。小猫と上条は地下に続く螺旋階段を降りていた。上条は小猫に小声で聞く。

「なぁ、土御門達が全然降りてこないんだけど、このまま行って大丈夫なのか？二人がこっちに来るまで待った方がいいんじゃ……」

「ダメ。二人が来ないのは恐らく、聖堂にも敵が潜んでいたから。恐らく敵は各個撃破を狙ってる」

「だったら……」

「二人が確実に勝つとは限らない。祐斗先輩は強いし変態グラサンが強いのも知ってるけど、万が一二人が負けたら私達は挟み撃ちに遭う。そうなったら完全に詰み。だから私達は進むしかない。早いうちに少しでも敵の戦力を減らしておかないと」

小猫は待機案を蹴って降り続ける。置いていかれないよう歩きながら上条は上を向く。自分と小猫の足音以外の音は無く、光も見えない。目に見えた変化が欲しい上条は立ち止まり、丁寧につけている手すりの外に顔を出して下の様子を確認する。もう五メートルくらい下では光が漏れている。もうすぐ地下に……

「っ来た！」

小猫が上条の服の襟を掴み、壁まで引っ張る。上条の頭部があった部分を光の銃弾が通過した！

「来たぞ！蜂の巣にしてやれ！」

下の明かりが大きくなる。どうやら階段の下にある扉が開いたようで、その中から神父の服を着た男達が十人飛び出してきた。彼らはフリードと同じように拳銃や剣を懐から取り出し、階段を上ってくる。

「剣と銃の比率は半々。あなたは剣持ちの敵に集中して。銃弾はどこに飛ぶかわからないから、私が先に銃撃部隊を制圧する！」

そういうと小猫は螺旋階段を飛び降りた！銃を持った神父が一斉に小猫を狙い発砲するが、小猫は懐に持っていた光喰剣で光を全て吸い取る！

「対策も無しに弱点に突っ込んだりしません！」
小猫は手すりにつかまり銃撃部隊の後ろに飛び移った。剣の柄を口で加えると、四足歩行に移行して神父達に飛びかかる！
一人目の腹を殴ってダウンさせると彼を盾に二人目三人目を低姿勢ラリアットで転ばせ、足で顔を蹴飛ばして意識を飛ばす。四、五人目が撃ってくる弾丸は盾に受けさせ、弾丸を捌ききったところで盾を彼らに向けて投げた！
銃撃では対処できず、逃げ場もない神父達はそれをもろに喰らい、倒れる。小猫は倒れて隙だらけの腹を踏み潰し、残り二人も失神させた。
「こっちは制圧した。そっちはどう!?」
小猫が上を向く。
上条は階段を上って剣筋から逃れながら、右手だけを突き出していた。一番前の神父の光剣が上条の掌にぶつかり、消える。神父達が驚愕して止まったその一瞬を突き、上条は跳ぶ！神父の顔面を重力の手助けを借りて全力で殴り飛ばした！
神父は後ろに吹き飛び、他の神父に衝突する。二人ほど剣を取りこぼし、螺旋階段の底に光剣が落ちていった。
「クソぉっ！」
剣を落とした二人は後退しようとする。が、その頭を追い付いた小猫が掴むと階段と壁に叩きつけた！さらに上条の方を向いていたもう一人の神父の後頭部を叩き、意識を飛ばす！
「これで残ったのは一人……っつ!?」
小猫は顔を上げて目を狭める。目の前に光が迫っていた。残った神父、彼が小猫に向かって剣を振り下ろしていたのだ！眩い光が小猫の身を焼く……その寸前！
「おぉぉぉぉぉぉ!!」
上条の右手が剣に伸びる！小猫の肌に届く前に右手に触れられた光はその場で雲散霧消した！上条はそのまま神父の身体にのしかかり、羽交い締めにしようとする！
「今だ！ダウンさせてやれ！」

「フォローありがとうっ！」
小猫は拳を固めると、神父の顔面に叩きつけた。
「……ふぅ。これで制圧完了。あとは下の部屋で首謀者を倒すだけ」
「なぁ、これだけ音を立ててたんだし、待ち伏せとかされてないかな？」
「されていると思う。でも、行くしかない」
二人は足早に階段を降りる。銃撃部隊が転がっている場所を通り過ぎる。直後のことだった。
パン、と乾いた音が響く。上条の口から、赤黒い液体が零れ落ちた。
彼の脇腹に、小さな穴が開いているのを小猫は見つけた。
血の気が引いた小猫は上条の背後を凝視する。一人の神父が再び地面に倒れていく。彼女はその神父が、先程盾にしていた神父だと気がついた。銃弾を受けた痛みで意識が戻ったのだ、とわかった。
「ごめんなさい！あなたは私を助けてもらったのに、私はあなたを怪我させてしまった！」
小猫の言葉を、上条は途中で静止した。
「俺は大丈夫……！それより行こう……親玉はもう直ぐだ!!」
上条は右手で傷を抑えながら、階段をゆっくり降りる。小猫は慌てて、上条の前に着いた。
階段を降りきった二人。前にある開きっぱなしの扉から光が漏れている。二人は慎重に扉に入った。
中は薄緑色に染まっていた。その中央で一人の修道女が跪き、協会にある十字をひっくり返した、逆十字に祈っていた。
「……ハエの掃討は終わったかしら？……あら？」
女は立ち上がり、こちらを向く。修道服が消え去り、ビキニのような格好になる。さらに背中から黒い一対の柔羽が飛び出し、手に光の槍が握られた。
「はぁい、悪魔さん。そっちの男はどうしたの？怪我してるみたいだけど……私の部下達も神父達も、ある程度の仕事はしてるってことかしらね」
上条は彼女を見て、一つ問う。

「お前がアーシアを襲ったのか？」
女は渋い顔で答える。
「私が襲った訳ではないけれど、命令したのは私よ。それが何か？」
「いや、いいさ。それだけ聞ければもう何も言うことはない!!」
上条は、右手を握った。

槍技

挨拶がわりにと光の槍が飛んでくる。上条はそれをとっさに避けた。腹の傷が疼くのを唇を噛んで我慢する。

小猫が剣を持って突撃する。相手が飛ばして来た二撃目の槍は剣に斬られて形を失った。そのまま小猫は堕天使に向かって袈裟斬りに斬りかかるが、堕天使は翼を広げてバックステップでそれを回避した。

「ふーん、事前に何か小細工してきてるようね。確かに光が私達の攻撃手段だし、それを警戒するのは当たり前よねぇ」

言いながら堕天使は再び光の槍を手に創る。ただし今度は、二つだ。

「じゃあ今度は、その剣の強度を見てみましょうか？」

光の槍が二本、小猫に向かって投げられる。小猫はそれらを薙ぎ払った。剣が光を吸収し、槍は消滅する。

すると再び二本、槍が投げられる。小猫も応じる。光の槍は揺らいで消えた。

次々と投げられる槍に小猫は冷静に対処していくが、八本目。

「っ!?」

光の槍が剣身にぶつかり剣にヒビが入った。剣はそれでも光を吸収する。次の光の槍が引き寄せられるように剣にぶつかり、剣は粉砕した！

それでもなお迫ってくる光の槍を、小猫は身体能力で何とか避ける。

「あはははは！ほらほらもっと早く避けないと！ハリィ！ハリィ!!ハリィィ!!!ってね!!」

口が裂けんばかりに笑みを広げ、腕を動かす彼女の横から、隠れて移動していた上条が飛ぶ！

そう、小猫の行動は全て陽動。上条による光攻撃の無力化こそが真の狙い!!

しかし。

「バレないかと思った!?そんな生臭い臭いぶち撒けといてさぁ！」
上条の方向に堕天使の手が伸びる。その手に槍が再現された！
「突き刺さってくたばれ!!」
上条に対し、堕天使が突きを放つ!!

パキィ!!と甲高い音が響いた。
堕天使は目を見開く。槍が消滅した。それも先ほどのように破壊されたものが少しずつ取り込まれるのではなく、一瞬で雲散霧消したのだ。
その理屈を考える暇を、しかし上条は与えなかった。
「まずは一発、アーシアを襲った分だ!!」
顔面に放った拳は堕天使が咄嗟に上体を反らして交わそうとするが間に合わず、鼻の頭に命中した。
「っ～～!!何するのよ！ハエ風情がこの私ごときに触れるなんて、ありえないわ!?」
「俺はハエなんかじゃねぇ！お前らが襲おうとしたアーシア・アルジェントの保護者、上条当麻だ!!」
「上条当麻……！ドーナシークが話していた、光を消す男……」
上条の名乗りを聞いた堕天使は目の色を変えた。
翼を閉じ、手を下げて言う。
「私の負けよ。光攻撃が潰されるっていうなら、私に勝ち目はない。アーシア・アルジェントを襲うのはもうやめる」
上条は小猫を見る。彼女もこの言葉をどう取っていいのかわからず困惑しているようだ。
だって、と堕天使は続けた。
「ここに、もーーーっといい『神器（セイクリッド・ギア）』があるんですもの!!」
堕天使の手にまたしても、槍が握られた！彼女は上条に向かって槍を振り下ろす！上条はそれに対して右手を出し……
「っっ!!?」
嫌な予感がした上条は左に逸れる。退避できなかった右手のひらに槍の先尖が掠り、そこから鮮血が飛び散る!!

「……へぇ、光じゃなくて本物の武器なら、攻撃を喰らうんだぁ」
　堕天使はクツクツと嗤う。嗤いながら、槍頭に付いた血をペロリと舐めた。
「転生悪魔か、それともただの人間なのかは知らないけど。タネが割れれば楽なモノよね。あなたは光の攻撃を無かったことにできる……もしかしたら他の魔力なんかも無効化できるのかもしれない。でも、魔力で造られたものではない、ただの槍のダメージは喰らってしまう。魔力頼りの人外には致命的な優性を誇るんでしょうけど、私はこれでも元天使だから、武器もそこそこ扱えるのよ！」
　槍を構える堕天使。その武器を折ろうと、小猫が突撃する！
「ただの槍なら私だって壊せます！さぁ、次はあなたの――っ!?」
　槍の柄を破壊し身体を翻して直接攻撃を加えようとした小猫の顔面を、堕天使の手が掴む。もう片方の手が、小猫の腹に当てられた。
　光の槍が、当てられた手に現れる。
　小猫の腹を貫通して。
「あはははは、ちょっとはいい格好になったじゃない！このまま槍を一回転させれば上半身と下半身がおさらばするかも「おい」!!」
　声に、堕天使は顔をそちらに向けた。声の主……上条当麻は、堕天使を睨む。その表情に、堕天使は少し怯んだ。
「何、塔城にしようとしてんだ？」
「な、なにって、見たらわかるでしょ？この子には死んでもらうのよ。あなたから奪う邪魔をされないようにね」
「俺の神器が狙いなんだろ……なら、その手を離せ。そんなことをしなくたって、俺一人で戦ってやるさ」
　驚いたのは小猫だった。力が入らないながらもなんとか言葉を紡ぐ。
「むちゃ……この堕天使は四人でならともかく、あなた一人では勝てない……」
「それでも俺は戦ってやる。ぶん殴って反省させて、アーシアに謝らせてやる」
　堕天使は小猫を離す。小猫はその場にうずくまる。彼女は動けな

いと判断し、堕天使は空に向かって手を上げる。刀身から鞘まで真っ黒な刀が、その手に握られた。
「この国はこんな武器も売ってるから便利よね。念のためにと持っておいてよかったわ」
刀身を指でなぞりながら、堕天使は呟いた。彼女は刀を上条に向けると、嗤った。
「確かこの国では刀で戦う時に、名乗りを上げるんだってね。
堕天使・レイナーレ。あなたの神器をいただくわ！」
言葉と共に、堕天使――レイナーレは翼を広げて上条に急接近する！上条がしゃがんで避けたその上を、レイナーレの一閃が通過した!!

道程

接近戦は不味い、と上条は床を転がり距離を取る。儀式のために置いていたらしい鉄製のランプスタンドを手に取った。
「そんな物で私の刀に対抗できると思って？」
言うが早いか、レイナーレは上条に向かって真っ直ぐに飛んで行く。黒刀とスタンドがぶつかり、火花が散った。
レイナーレの剣を上条はスタンドでどうにか捌く。レイナーレは振りの間に突きも混ぜて上条を翻弄していき、上条はその度に身体に傷を付けていく。
十数合打ち合って、スタンドがついに折り曲がった。上条はもう一つあったランプスタンドを手に取ろうとするが、それは先にレイナーレによって入り口あたりにまで蹴飛ばされた。
「さぁ、これでおしまいね。無駄に疲れさせてくれちゃって！その報酬は貰うわよ!!」
黒刀が右手に振り下ろされる!!刀が上条の肉に食い込んだ!!
そのまま右手首を切断すると思われていた刀は、しかし腕を半分ほど進んだところで動きを止める。ガチン！という鈍い音が、上条の右手で聞こえた。
「な、動かない！まさか、神器を内側に内包していたのか!?」
驚くレイナーレの顔面に、上条の左拳が炸裂する！レイナーレはその衝撃に刀から手を離し、ノーバウンドで二メートル吹っ飛んだ。床に叩きつけられそうになったところで翼を広げ、なんとかダウンせずに地面に着地したレイナーレ。衝撃と痛みに歪んだ顔から、鼻血が一筋、つうっと流れて地面に落ちた。
「神器を内包？そんなの知らねぇよ。ただな、刀ってのは物を切ってく時に切った物が付着して、どんどん切れにくくなるんだ。それに、ライトスタンドとの衝突で刀にも多少のダメージは行ってるはずだぜ……っつ！」
上条は腕から刀を力づくで抜き取る。その傷から血が勢いよく溢れ出た。しかしレイナーレはそちらではなく、刀を注視する。血で赤

黒く染まった刃の先が、汚い波状になっているのに気がついた。
上条が刀を床に叩きつけると、刀は音を上げて砕ける。それを見ながら上条はシャツの下部分を破り、二の腕あたりをキツく縛った。
「次は何だよ。今度は銃でも持ってくるか？」
「……いいえ、もう私は武器は持ってないわ。
だけど、私が人間如きに負けるわけ無いじゃない！」
目を見開くレイナーレ。翼を広げた彼女は、今度は上条の周りを回る。そのスピードが目で追えなくなってきた時に、上条の背に衝撃が走る！レイナーレの蹴りに、上条は吹き飛ばされて倒れた。
慌てて起き上がろうとする上条、その顔面にレイナーレの膝が飛ぶ！勢いで上条の身体が後転する。何回か回った上条は、回転の力を借りて再び立ち上がる。
「……強いな、アンタ」
「？……当たり前でしょう？あなた達みたいな悪魔や人間には、到底負けないわ」
レイナーレは血を拭いながら嗤う。その姿に上条は、言った。
「じゃあなんでアーシアを狙う……いや、神器を狙うんだ？」
「それは……私達のトップ、アザゼル様やシェムハザ様、彼らの力となる為よ！アーシア・アルジェントの治癒の力、それと同等以上の神器、魔力を封じる力。私はその力を持ってして、彼らの傷を癒す役目、あるいは肉壁として彼らを守るの。そう、私がお二方の力となれるの！こんな素敵な事はないわ！」
彼女は両手で自身の身体を抱き、悶える。
「ふざけるな!!」
叫びにレイナーレはハッ、と正気に戻る。目の前に、上条当麻が映った。
「テメーの勝手な都合に、アーシアを巻き込むんじゃねえ！アーシアはこっちの調査に来ていきなりお前達に襲われた。それでもお前達に会うために、再び教会を訪れた！土御門から今回のアーシアの目的を聞いて、俺はやっとこの前アーシアが俺を連れて教会に行った意味がわかったんだ。

アーシアはお前達堕天使を、早いうちに逃がそうとしてたんだ！教会としてはこの駒王町から堕天使を退けなければいけない。土御門も危なければ清掃……始末しろと言っていた。でもアーシアは優しいから、俺を連れてお前達の拠点を訪れた。俺を連れていったは普通の人間が一緒なら堕天使も襲って気はしないだろうから。それなら、ちゃんと話し合いができると思ったからだ。土御門達教会の戦士の襲撃計画はすでに決まってた。それより前にアーシアはお前達を逃がそうとしてたんだ!!」

レイナーレはその言葉に目を見開く。平和ボケした十字教のシスター。レイナーレはアーシアの事をそう伝え聞いていた。教会を訪れたのも、そこにいる自分達が十字教の戦士であると信じていたと、そう考えていた。

上条は矢継ぎ早に続ける。

「そんなアーシアをお前達はまた襲った。俺を殺して、アーシアから強引に神器を奪おうとした！その理由が強くなるため？お偉いさんの力になるため？何が二人の力になるだ！他人から奪った力で強くなって、偉い奴らを守るなんて、そんなもんで守られたって、アザゼルだかシェムハザだかいう奴らは喜ばない!!」

「うるさい!!」

今まで話を聞いていたレイナーレが、突如激昂した！彼女の蹴りがまたも顔面に飛び、上条は仰向けに倒れる。前歯が一本、欠けて落ちた。

「お前がアザゼル様やシェムハザ様の名前を軽々しく口にするな！お前にあの方々の……私の何がわかる！

天から堕ちたあの日、穢れた私をアザゼル様は拾ってくれた！シェムハザ様は堕天使の私を認めてくれた！それが天から堕ち、絶望に染まっていた私にとってどんなに嬉しかったか！私は彼らになら、命さえ捧げられると思った！

そこから２００年間、死に物狂いで努力した。少しは地位も上がり、部下もできた。

でもそれだけ！私の手にはあの方々の背中は程遠い！数百年では

追いつけない！私は、少しでも早くあの方々の力になりたかったの!!
　神器があれば、私はさらに上に昇れる。遠かった山の頂が、一気にあと一歩のところまで見えてくる!!その可能性を私は知ってしまった!!知ってしまったら、そうするしかないじゃない!!」
「そのために、他の奴を犠牲にして良いと思ってるのかよ!?」
　上条は地面を押して立ち上がり、その勢いでレイナーレを殴る！レイナーレは少しよろけたが、それでも上条に殴り返す！
「自分が正しくない事をしているのはわかってる!!それでも、私はもう耐えられない！２００年、その長さがあなたにわかる!?私はその間を全て、堕天使達の為に費やした！でも、神器があれば２００年の努力なんてなくても、すぐに彼らの力になれると知ったの！
　あなたにわかる!?２００年の努力よりも、もっともっと長きに渡る努力よりも、たった一つの神器を手に入れる方がずっと効果的だと知った私の気持ちが！２００年を全て無駄にした、私の気持ちが!!」
　レイナーレの拳が上条の腹に入った！上条は膝をつくが、それでも立ち上がりレイナーレに反撃する！
「わかんねぇよ！でも、ひとつだけ言える！お前の２００年は無駄になんてならねぇ！
　頑張ってここまで来たんだろ！部下だってちゃんとお前に従ってた！堕天使達だって皆、お前の為に動いてた！だってそうだろ！お前が力を持ったら、あいつらは捨てられるかもしれない！それでも二人を足止めしてる！神父達だってそうだ！俺の腹の傷は、神父の一人が気絶しそうになった時でも、俺をお前のところに行かせない為にと撃ったものだ！お前を守る為にやったことだぞ！
　そんな部下達が何よりもお前の努力の証だろ！それを無駄だって言うなら、お前は一生上になんて昇れねぇ！追いつくことなんてできねぇ！だってお前が話すアザゼルやシェムハザってのは、部下に対して優しくできる奴らだからだ！部下を無駄だと言える奴がそいつらに追いつけるはずがねえ!!」
　ぶれる視界の中にレイナーレをなんとか入れ、そこに向かって拳を振るう上条。固めた左の拳がレイナーレの頬に当たる。もはや威力

はほとんどなく、ペチャッ、と血がくっつく音が妙に大きく聞こえた。
それでも、レイナーレは脚の力がなくなったかのように地面に両膝をつく。
「まだお前の人生は終わっちゃいねーんだ。２００年で進んだ距離は、２０１年目を諦める理由にはならねえ。
それでもその道を全否定して、他人に迷惑かけてでも楽がしたいってんなら、そんな幻想はぶち壊す……」
右手が、レイナーレの頭に触れた。
視界が暗闇に染まる――

閑話――家

教会での闘いから一夜明けた月曜日、時計は一二時を少し回ったところ。時間を確認して焦った上条だったが、カレンダーを見て安堵した。今日は祝日、海の日である。そして幸いにも本日は、補習のお誘いは来ていなかった。三連休を全て潰しては可哀想と言う小萌先生の配慮か、と上条は担任に感謝した。

そのままぼうっ…とカレンダーを見るうちに、上条はふと思う。

「そういえば、アーシアはいつ帰るんだ？」

質問にアーシアは首を傾げる。その仕草を更に疑問に思い、上条は質問を重ねた。

「アーシアの仕事は堕天使……レイナーレ達をどうにかすることだろ？土御門もそう言ってたし。で、それは何とか解決したわけだから、またイギリスに戻るんじゃないのか？」

「それは違います。私の目的はこの町の教会、そして教会勢力の監視です。この町は私達十字教にとっても重要な場所ですから、滞在して監視・報告を続ける必要があるんですよ」

なるほど、と上条は納得した。

「じゃあ今日からは、土御門の家に行くのか？」

「……本来はそのつもりだったんです。ですが」

アーシアは上目遣いで上条を見る。上条はその視線にたじろいだ。

「な、何でせうか？」

「私をここに住まわせていただけませんか？

もちろんただでとは言いません。月々お金は払いますし、食事や掃除等の家事も致します。ですから……」

「待て待て！土御門の家じゃなくてなんでうちなんだ!?うちは貧乏だし、家もそんなに広くないぞ？土御門の家のマンションよりは広いけど……」

聞かれて、アーシアは言い淀む。手を絡めて遊ばせながら、小さく呟いた。

「とーまさんなら、守ってくれそうな気がするから……です」

上条は、それを聞いた。
「……俺は、土御門みたいに強くない。守るなんて、そんな器用な真似はできない……けど。
アーシアがどんな危機に襲われても、絶対に助けてみせる。どれだけボロボロになっても、幻想殺しがなくなっても、俺がこの手で守ってやる」
我ながらキザな台詞だ、と上条は心の中で自虐する。アーシアは後ろを向いて小さく震えている。優しいアーシアさんは笑いを堪えてくれているのだと思うと、それはそれで悲しい上条なのであった。
「うちは家賃なんてのは別に必要ないぞ……あ、でもこの家に住むには父さんの許可が必要だから、ちょっと待っててくれよ」
上条は家の電話を使い、連絡を取る。十コールほど待ったところで、電話が繋がった。
『はいはい、こちら証券取引対策室、上条刀夜です……この電話番号は当麻で間違いないよな、ふつーに口走っちゃったけど他の人にもし違ったら割と一大事なんだなこれが!!』
「安心してくれ、父さん。今日は確実に俺だから」
父、上条刀夜の声を聞き、一先ず安堵する。しかし、あっち側はそれどころではなかったようだ。
『そうか、それなら良かった。とりあえず一安心だ。この電話が終わったらこの電話機はスクラップにしてくれると嬉しい』
言い終わらないうちに、刀夜の声が電話機から離れた。神経を耳に集中させて音を聞き取ると、どうやら父親はお小言を言われているらしかった。
しばらくして再び電話に出てきたのは母、椎奈(しいな)だった。
『当麻さん、お久しぶりね。刀夜さんから電話を受け取りました。その電話機は今後とも末永く暮らしますから、壊さないように』
「わかっております、お母様」
いつもより少し低いトーンの声を恐れ、上条当麻は早々に本題に入る。
「今、学校に留学しに来てる女の子がいるんだけどさ。その子の家に

するはずだったマンションが潰れちゃって、代わりの家が見つかるまでうちで泊めてあげたいと思うんだけど」
『あらあら。それならクラスの他の女の子が泊めてあげるのが筋ではなくて？男の子の当麻さんが、なにより外国語が全くもって不出来な当麻さんが宿舎として我が家を提供するのはおかしいわ。
あら、刀夜さん。何か言いたいことでも？自分も昔同じような状況になったことがある？あらあら、これ以上私を怒らせてどうするつもりなのかしら？それともどうされたいのかしら？』
バシバシと破裂音が連続して聞こえてくるので、上条は「とにかくそういうことだからーっ！」と早口で言って受話器を優しく置く。折り返しの電話がかかってくるが上条はスルーした。急に切られた事や電話を取らなかった事への怒りは、父親がうまく抑えてくれるだろう。
「……どうでしたか？」
訊いてくるアーシアにオーケーサインを出しながら、上条は伝家の宝刀（ジャパニーズドゲザ）が母親にどれだけ通用するか検討した。
頭を捻らせた挙句考え続けても仕方がないという結論に達した上条は、切り替えてアーシアに上条家を案内する。一階のキッチンや風呂を見せたあと、二階へと移動した。自分の部屋をチラッと見せ、客が来た時に泊まれる用の部屋に案内する。父の刀夜は外国から帰ってくる時に部下や現地で知り合った者を一緒に連れて来ることがあるため、客用の部屋は用意されていた。
「あとは俺の向かいの部屋が父さんの部屋で、奥にあるのが母さんの部屋だ。俺の部屋とその部屋以外は出来るだけ入らないようにしてほしいな」
上条のお願いにアーシアは頷いた。
「あれ？ではここはどなたのお部屋なんですか？」
アーシアはふともう一つの扉を見つけた。客用寝室の向かい、上条の部屋の隣にもう一つ、扉があったのだ。
「そこは物置だ。結構中が散らかってるから近づかないように」
「私が掃除しておきましょうか？」

「あー……違うんだよ。別に汚いわけじゃないんだ」
言って上条はその部屋を開ける。
部屋の中には像や人形、ぬいぐるみや旗、生き物の標本など様々なものが置いてあった。
「どれもお守りだよ。父さんが外国に仕事に出る度、買ってくるんだ。そっちの像が家内安全、そこの旗は開運祈願、隅の方にある虫の死骸は幸運のお守りなんだってさ。毎回土産として沢山買ってくるから、置き場に困ってとうとうお守り用の部屋を作ったってわけだ」
そして最後に庭を見せようと外に出る上条。ドアを開けると目の前に大きな段ボールが落ちていた。
「風で飛ばされて来たのか？それとも宅配便？まぁいいや、潰して捨てなきゃ……」
段ボールを開くとその中には、太り気味の三毛猫が。
後ろの聖女サマがこの小さな命を放っておくとは思えない。さらに増えるだろう生活費と、さらに困難になった母親への弁明に、上条は頭を悩ませた。

夏休み

三連休もそれほど休んだ気がしなかった上条は、重い体を引きずって学校に向かう。火曜日が過ぎ水曜日を過ぎ木曜日を過ぎて、遂に金曜日。

この日は待ちに待った終業式。校長先生のありがたいお話を乗り越えて全校集会を終え、様式美の注意事項を聞いた後、クラスに戻って小萌先生から簡単な注意の復習を受けると、遂に解散である。

土御門と藍花とともに下校していた上条だったが、今日がスーパーの特売日である事を思い出し、二人と別れて店へと走る。時刻は昼間、まだ値下げ品は売り切れていないと信じて――

――結論、主婦を舐めるんじゃありません。

結局いつも通りモヤシ多めの買い物になった上条は、初めての高校の夏休み記念にと珍しく奮発して牛肉も購入。ついでにあの捨て猫の為に安い猫缶も買ってやる。

捨て猫はアーシアによってスフィンクスと命名された。あの半獣半人の像の名を付けられた猫はそれこそ人間のように好き嫌いが多いらしく、好みの物以外はあまり口にしたがらない（嫌がりながらも食べてくれるだけマシとも言えるが）。今のうちに安い食事に慣れさせた方がいいだろうと思ってのこの猫缶購入であった。

「まぁ最近のは安くても栄養バランスが良いとか聞くし……」

店の外を出ながら猫缶のパッケージを眺める上条。

「あー！やっと見つけたわよ！」

安売りの卵が買えなかったのは、ある意味良かったかもしれない。上条は驚いた拍子に落とした買い物袋を拾うと、わざとゆっくりそちらを向いた。

想像した通り、目の前で腕を組み待っていた少女は怒り顔だ。それ以外の表情をあまり見たことがない上条はこれでも真面目な顔をしてるのかも、と一瞬考えたが、それはないだろうと思い直す。

「ここであったがなんとやらって感じだから、今日こそ私と勝負しな

さい!!」
　エンカウントしてしまった野生の少女の名は御坂美琴。駒王学園中等部の生徒らしい。なぜあんな元お嬢様学校の生徒が自分を襲うのかと考えて泣きたくなった。
「ちょろっと～？何こっちを無視してボーっとしてる訳!?」
自分だけの現実（げんじつ）に精（せい）を出していた上条は、その声で正気に戻る。夏休み気分で浮かれていたのに水を差され、流石の上条も言い返したくなった。
「不良二、三人に絡まれてるところを助けたら襲われるって何でだ何でだよ何でなんですか三段活用!!だいたい俺の負けでいいって言ってるじゃないかよ！それともお前はひ弱な男の子をボコボコにして快感を覚えるサディスティックな趣味がお有りですかー!?」
「う、うっさいわね！その舐めてるような感じが嫌いなのよ！いいから勝負しなさい勝負！今度こそけちょんけちょんにしてあげるんだから！」
　御坂の少し動揺したような声を聞き上条はフッ、と鼻で笑うと先程と同じようにわざとらしいほどゆっくりと背を向ける。何かしてくるか、と構える御坂。上条は御坂に背を向けたまま足に力を込め……後ろに向かって全力疾走!!
「不幸だー!!」
安全領域（我が家）にまではさすがにこの少女も追って来ない。脳の処理が追いつかなかったらしく反応が遅れた御坂を尻目に、上条は急いで帰路に着く。
　後ろでバチバチッと激しい音が鳴った。
～～～～～～～
　この日はアーシアが台所に立ってくれていた。上条はその間に、自分の部屋の掃除に取り掛かる。アーシアがいる以上、汚くしていたら申し訳ない。それに、出ていたら不味いものも片付けておきたい。
　一通り部屋を綺麗にした上条は、最後の仕上げに床を雑巾で拭き上げる。部屋の隅からしっかりと拭いていき、真ん中あたりにたどり着いたその時。

床の中央に、魔法陣が出現した。
出て来たときには三十センチくらいだった図形の塊は、だんだんとその大きさを広げ、上条の部屋の床を侵食していく――！
「……よっ、と」
上条は魔法陣に右手で触れた。すると陣は拡がるのを止め、粉々に砕け散った。
「……さて、掃除掃除！」
夏休み気分のままでいたい上条当麻は、新たな厄介ごとの種を忘れることにした。雑巾掛けを再開する上条。そこで再び魔法陣が!!
「この魔法陣をぶち壊す！」
右手に触れ、パキンと一瞬で砕ける魔法陣。それを見ないように上条は掃除を再開する。

またもや魔法陣が現れる!!
「はいはいげんころげんころ」
消えていく……

さらに魔法陣が現れる!!
「だーもー!?天丼は三回までしょーが!!わかったよ!!悪魔でも堕天使でも出てこい!!」
魔法陣はそのまま部屋の床を侵食するように展開していく。その中央部が光り、中から一人の少女が現れる。白い髪をした小さな女の子。塔城小猫だ。
「ちょっとー!?ついに俺の聖域(じたく)にまで攻めて来やがりやがったんですか!?いくらこんなとこまで来ようと、戦わねーもんは戦わないぞ！」
まくし立てる上条に、しかし小猫は言い返さない。立ったまま、頭を下げる。
「今日はお願いをしに来ました」
「お願い？」
小猫は息を小さく吸うと、上条に向かって言い放つ。
「婚約者になってくれませんか」

婚約

何故か小猫に眠らされ、気がつくと上条は駒王学園にいた。一室の中には沢山の蔵書の他にタロットや水晶玉などの占いグッズがバラバラに置かれている、そんな部屋の中央で目を覚ました上条当麻は、目の前にいる紅髪の女性に気がついた。

「御機嫌よう、上条当麻君。私がこの街を管理・統括する悪魔、魔王の妹のリアス・グレモリーよ」

大きな椅子に座り、長い脚を偶に組み直しながら上条の身体を測るように見ているのは、駒王学園二大お姉様と呼ばれる女、リアス・グレモリーだった。

彼女は右の頬を釣り上げながら言う。

「悪魔が約束事をすると言う事は、それ即ち契約を結ぶということ。お礼と言っては何だけれど、私があなたのお願いを何でも一つ聞いてあげるわ……何でも、ね」

そう言ってリアスは上条の目を見る。上条はそれに対し頭をガシガシと掻いたあと、

「じゃあお願いなんですけど、もう帰っていいですか？」

リアス・グレモリーが、二大お姉様の一角が気づけば脚にすがりついていた。

「お願い！見捨てないで!!あなたに断られたら土御門（胡散臭さの化身）しかいないの！」

「じゃあ土御門に頼めばいいじゃねーか!?俺まだ晩メシも食べてないし、アーシアが食事並べて待ってるんです！だいたい俺よりもめちゃくちゃ強い土御門の方が適任でしょ!?」

「ツチミカドなんて連れて行ったら絶対にウソだってバレるもの！小猫が推薦してくれたあなたなら大丈夫だから！お願い！協力して！」

「だーもー！わかったよわかりました！婚約者でもなんでも演じてやるから！」

その言葉にリアスは救われたとホッと息を吐き、笑顔で告げる。

「ホント？ありがとう！この恩は忘れないわ！

みんな入ってきて良いわよ！グレイフィア、もうアイツを呼んで構わないわ！」
呼ばれて隣の部屋から出てきたのは、四人の少年少女。
堕天使戦で共に戦った木場と小猫。そして知らない顔が一人に、知っている顔が一人だ。
「やあ、トウマ君。一週間くらいぶりだね」「どうも、さっきぶりですね」
木場は爽やかに笑って、小猫はそっぽを向いて言う。
そして、背の高い黒髪ポニーテール少女がスカートの端を摘んで片足を後ろに引き軽く曲げて、こちらに軽くお辞儀する。
「姫島朱乃（ひめじまあけの）と申します。リアスの女王（クイーン）をやっていますの。以後、よろしくお願いしますわ」
にこやかに微笑む女性に、上条も少し照れながら会釈する。そしてその隣でムッとする少女が。
「……アンタとこっち側で会うのは初めてよね。リアス・グレモリーの僧侶（ビショップ）、御坂美琴よ」
「小猫さん、あなた後輩に悪影響与えてませんか？」
「……何か言いたいことでもあるの？」
「何かって御坂が襲ってくるのってお前の影響だろ絶対！駒王学園の女の子二人に襲われるって偶然かと思ったけどこんなつながりがあるのなら話は別だぁ！」
襲い掛かろうとする小猫を木場が羽交い締めで止める。御坂も襲ってくるかと身構えていたが、彼女はポカンとした顔で小猫を見ていた。
「……！みんな元の位置に戻って！当麻君は、私の椅子隣に！」
リアスが何かに気づいて指示を出す。彼女の視線の先には、先程家に出現したような魔法陣が展開され始めていた！
命令に全員が光速で移動する。リアスも椅子に座り直し、脚を組んだ。上条もワンテンポ遅れてリアスの元へ行こうとする。
が、そこに先程小猫が暴れた際に床に落ちていた蔵書が！
「いっ!?」「えっ!?」

滑って転んだ上条当麻はリアスにダイブ。全身がリアスに乗っかり、豊満な胸を幻想殺しが鷲掴みにしていた。
こんな状況で魔法陣が光を発し、中から一組の男女が現れる。
「お嬢様、ライザー様をお連れいたしまし……たっ!?」
「よう愛しのリアス！このライザー様がお前に会うためにこんなところまで来て……な〝っ!?」

全世界が、停止したかと思われた――

宣戦布告

「貴様ぁ！」

魔法陣から出てきた男――ライザー・フェニックスは怒り心頭で、上条に向かって炎球を飛ばす。それに対して慌てて立ち上がった上条は、右手でその炎を弾く。

「なにっ!?」

一瞬で消し飛んだ炎に驚き、固まるライザー。それを見た上条は即座に動く!!

膝を地面に落とし、両掌を床につける。その手に向かって、頭を全力で叩きつける!!

「本当に申し訳ありませんでしたーっ!!」

上条の奥義、土下座である。頭を下げる素早さ、そして下げた後の一向に動こうとしない姿勢を見て、ライザーも共に出てきた女性も少しは冷静になったようだ。女性の方……リアスの義姉、グレイフィアがリアスに視線を戻す。

「お嬢様、この方は……お嬢様!?」

リアスは、この痴態に完全にショートしていた。顔が髪よりも真っ赤に染まり、自分の身体を隠すように両手で抱き、俯いて小さく震えている。『何でも一つ聞いてあげるわ』という言葉に疑問を覚えるようなその反応に、眷属達も慌てた。具体的には、小猫が制止を振り切って飛び出し、上条を蹴り飛ばした。

朱乃と御坂の身体から、バチバチと電気が漏れ出す。ただ一人、木場だけが皆を宥めていた。

「皆落ち着いて！トウマ君も悪気はない、わざとじゃないはずだ！小猫ちゃん、もう暴れないで！部長も落ち着いてください！」

混乱極めたオカルト研究部室。その喧騒が収まるのに、十分以上を費やした――

～～～～～～

――リアスが、紅茶を口につける。心を落ち着かせる効果があるというハーブの香りが鼻につき、リアスは顔を顰めた。

「やぁ、流石リアスの女王が淹れてくれたお茶は美味しいものだなぁ!!」
「痛み入りますわ」
ライザーが語気を強めに言う。朱乃もそれに乗っかるように礼を言うが、その笑顔が引きつっている。
部室には、重い空気が漂っていた。その原因、上条当麻は右頬を腫らしながら、リアスの右側に侍っている。その両脇を木場と美琴が固めており、小猫のみ反対側に隔離されている。リアスを守るためか上条を守るためか、張本人には計りかねた。
「……リアス。約束の件だ。今回は日取りを決めるためにここに来た」
その空気を切り裂くように口を開いたのは、ライザーだった。リアスの目に、光が戻る。
「以前も言ったはずよ……私はあなたと結婚しないわ」
「ああ、以前にも聞いた。だがリアス、君は良くても家の方はそうにもいかないだろ？君のところの御家事情は意外に切羽詰まってると思うんだが？」
「余計なお世話だわ……私が次期当主である以上、婿の相手くらい自分で決めるつもりよ！」
言葉に感情が乗る。それを見てライザーはニヤリと笑う。空気が戻ってきた、そう思ったようだ。
「キミの感情は大事だ。確かにそう思う。だがそれよりももっと大きな意味が、この結婚には込められている。純血であり、上級悪魔同士の結婚。転生悪魔が増えに増えた昨今、純血の子はだんだんと減りつつある。戦争の影響もあり、『七十二柱（ななじゅうふたはしら）』は半数も残っていない。この縁談には悪魔の未来がかかっているんだぜ」
七十二柱、というのはピンと来なかった上条だが、一つわかった事がある。ライザーも酔狂でこの縁談に向かっているわけではない、という事だ。それに対し、リアスもライザーと視線を合わせ、言う。
「私だって、家を潰そうとは思わないわ。婿養子だって迎え入れるつもりよ」

ライザーは笑みを広げた。その顔をキッと睨んで、リアスは続ける。
「でも、あなたとは結婚しないわ、ライザー。私は私が良いと思った者と結婚する。古い家柄の悪魔にだってそれくらいの権利はあるわ」
リアスの言葉に、ライザーは表情を曇らせた。それでも反撃とばかり口を開く。
「俺達の到着を忘れるほどに乳繰り合っていたそのガキと結婚するために、俺を振るのか？」
リアスの顔が再び赫らむ。それでも今度はショートせぬようにと、リアスは胸の下で腕を組み、宣言する。
「そ、そうよぉ!?私はか、彼とけけけ結婚すると決めてるのぉ!!彼はま、魔術師で、契約もしてる。将りゃ、来は眷属として、そしておっおっ、夫として迎え入れりゅつもりよぉ!!だかるぁ、あなたとは結婚しないわぁ!!ごめんなさいねぇ！」
リアスの大声は所々つっかえ、裏返った。もともと言う予定だったセリフがここまで変化するとは上条も眷属達も思わなかった。
「……俺は人間界があまり好きじゃない。この世界の炎と風は汚い。炎と風を司る悪魔としては、耐え難いんだよ……」
ライザーの周囲を炎が駆け巡る。火の粉が室内に舞っては消えていく。
「だから、俺はその無様な婚約者やキミの下僕を全て燃やし尽くしてでも、キミを冥界に連れ帰る!!」
ライザーの右手に、炎が宿った!!
リアスの眷属も全員、臨戦態勢を取る！リアス自身も、腕を解き手を前に構える！
パァン！と一発、乾いた音が室内に響く。手を思い切り叩いた音だった。
「お嬢様、ライザー様、落ち着いてください。これ以上やるのでしたら、私も黙って見ているわけにもいかなくなります」
二人を一瞥するのはグレイフィア。その目に押さえつけられたかのように、ライザーは炎を引っ込め、リアスも構えを解いた。グレイ

フィアはそれを見て業務的に続ける。
「こうなる事は、旦那様もサーゼクス様もフェニックス家の方々も重々承知でした。正直申し上げますと、話し合いで決まるとも思えなかったのです。これで決着がつかない場合のことを皆様方は予測し、最終手段を取り入れることにしました」
グレイフィアの目が再びリアスとライザーを映す。そして、その目が上条にも向いた。
「この結婚を遮るのは、お嬢様の意志でございます。ご自分の意志を押し通すのでしたら、ライザー様と『レーティングゲーム』で決着をつけるのはいかがでしょうか？」
レーティングゲーム？上条は聞きなれぬ言葉に疑問を浮かべる。横に立っている木場が小声で脳内の疑問に答えた。
（上級悪魔の方々が行う、眷属同士を戦わせて競い合うゲームのことだよ。普段は成人した悪魔しか参加できないんだけど……）
木場の目がグレイフィアに向く。いや、この部屋にいる全員が、グレイフィアに視線を集中させていた。
「皆様ご存知の通り、公式な『レーティングゲーム』は成熟した悪魔しか参加できません。しかし、非公式のゲームならば、半人前でも参加できます。この場合の多くが、このような問題の収拾のためとなっております」
「ようは力で認めさせてみろ、ということよね？……いいわよ、こんな好機はないわ。ゲームで決着をつけましょう、ライザー」
その言葉にライザーはニヤリと嗤う。
「俺はもちろん構わないさ。ただ、一つだけ条件がある」
「何かしら？こんな未成熟な私にハンデを付けろというのではないでしょう？」
リアスの挑発的な視線を、ライザーは真っ向から見返す。その視線が横に外れ、笑みが消えた。ライザーはその視線の先……上条当麻を指差して言った。
「この男!!リアスが婚約者と言ったこいつにも、レーティングゲームに出てもらう!!俺がこいつを燃やし尽くせば、言い訳も、逃げること

もできない！その時こそ、リアスが俺のものとなる時だ!!」
　上条当麻は最初、自分に向けられる指と言葉を理解できなかった。頭の中で反芻し、言葉を噛み砕く。脳が出した答えを確認した時に出たのは、動揺だった。
「待ちなさい！彼は私の眷属ではないわ！」
　リアスの異を、しかしライザーは一蹴する。
「こいつは魔術師で、将来は眷属にする予定、だろ？キミの眷属となるならばレーティングゲームの舞台に上がる理由は十二分にある！そして男としても、婚約者たるこいつをぶっ飛ばす必要がある！レーティングゲームをやるという我儘を通すというのなら、俺はこいつを参戦させるという我儘を通させてもらう！グレイフィア様もそれで構いませんね!!」
　グレイフィアは急に飛んできた言葉に考える仕草を見せた。
「……承知いたしました。此度のレーティングゲームのみ、上条当麻様のレーティングゲーム参戦を、特例的に許可いたします」
「ちょっと、グレイフィア……」
　グレイフィアは目でリアスを黙殺する。その態度に何を思ったか、ライザーは付け加えた。
「リアス、ゲームは十日後でどうだ？今すぐやってもいいが、それでは面白くない」
「私にハンデをくれるというの？」
　リアスの睨みを、ライザーは飄々と躱す。
「レーティングゲームは甘くない。流石にまだ眷属にもなっていない男がいきなり参戦して動けるとも思わないからな。それはそいつだけじゃなく、他の眷属達もそうだ。十日あればキミも眷属も少しはマシになってるハズだ」
　ライザーの周りを再び炎が囲う。ライザーの足下に、魔法陣が展開されていた。
「そういうわけだ。十日後、レーティングゲームで会おう。その時こそ、お前を燃やし尽くしてやるぞ、上条当麻」
　ライザーは最後に上条を睨むと、焔と共に姿を消した。部屋には少

しの火の粉と、眷属だけが残った――

駒

レーティングゲームに巻き込まれる事になった上条当麻（かみじょうとうま）は、新たなる厄介ごとに頭を抱える。

「当麻君、少しいいかしら」

そんな上条を見て、リアスが声をかける。渋い顔の上条はそちらを向いた。

「今回こうしてあなたを巻き込んでしまった事、深く謝罪するわ。経緯はどうあれ人間のあなたをレーティングゲームに、ましてや私事に巻き込んでしまうなんて……これじゃあ、上級悪魔失格よね」

頭を下げるリアス。年上の女性に頭を下げられた上条は慌てて告げる。

「そんな、謝らないでくださいよ。リアス先輩と婚約者の約束をしたのもこっちですし、相手さんを怒らせたのも……こんな状態を作っちゃったのも上条さんですから。もうこうなったら腹を括ってやってやりますよ！」

無理やり作った笑顔は引きつっている。それを見たリアスはパチン、と指を鳴らした。何もない空間に黒い穴が現れ、中から小さな箱が落ちてくる。

「当麻君……あなた、悪魔に転生してみない？」

そう言ってリアスは箱の中から紅い物を取り、上条の前に置いた。チェスの駒……兵士（ポーン）の駒だ。チェスなんぞ触れたことのない上条にはそれが何かはわからなかったが。

「これは悪魔（イーヴィル・ピース）の駒。これを取り込んで王……私と契約した者は悪魔になれるの。悪魔にはたくさんのメリットがあるわ。

まずはパワーアップ。視力や聴覚なんかの五感に、筋力や脚力。身体能力が著しく上昇して、怪我もし辛くなる。

次に長寿化。人間の寿命は長くて百年くらいだけれど、私達悪魔は一万年近くの時を生きられるの。

更に私の眷属になれば、冥界……悪魔達の住む世界に、土地を持てるわ！その土地の収入の一部はあなたに渡るし、その土地自体を自由

に改造できるわ!!
他にもメリットが盛りだくさんよ!どう?私と眷属契約してみないかしら?」
詰め寄るリアス。それを手で静止しながら上条は質問をする。
「そ、それだけ聞くとすごく良く聞こえるけど、デメリットなんかもあるんでしょ?流石にそんなうまい話に乗せられる上条さんではありませんのことよ!」
そう返されたリアスは少し動きを止める。
「デメリット……デメリットと言ったら三つくらいね。
一つは昼間、太陽が上がっている時なんかは少し弱くなるわ。とは言っても眠くなるくらいで大したことではないかしらね。
二つ目は神社やお寺、教会なんかに行く時には許可が必要な事。天使は私達悪魔にとっては敵だから、敵の本拠地に行ったらダメージを受けてしまうの。同じような理由で神頼みなんかもできないわ。聖書の神に祈ると、かなりの頭痛がするらしいわ。試したことは無いけれど。
三つ目、あなたが私の眷属になったら、少なくともレーティングゲームには参加しなくてはならないわ。私はこう見えて、レーティングゲームの王者を目指しているの。だから将来的に、今回のような戦いに幾度と参加してもらう事になるわ。レーティングゲームは絶対に死にはしないけれど、それでも痛みや怪我はある。
これくらいかしら。どう?メリットとデメリットを踏まえて、考えてみてほしいところね」
上条はそれを聞いて目を閉じ、熟考する。正直戦いなんかに巻き込まれたくない。平和に暮らしていくのが上条の本来の目標だ。
しかし、アーシアと関わり、世界の裏を知ってしまった。実際に堕天使達と戦った。教会の使いであるアーシアを家に泊めているし、戦士である土御門とも仲が良い。こうして悪魔達とも縁を持った。これからもトラブルに巻き込まれる可能性はかなり高い。
先日逃した白髪の神父を思い出す。堕天使達とは違いあいつは依然逃げたままらしい。いずれ襲撃されてもおかしくはない。

先程敵視された炎を操る悪魔を思い出す。幻想殺し（イマジンブレイカー）があの炎を確実に消せるという保証はない。
最後に、アーシアとの約束を思い出す。上条当麻に期待し、その身を預けてくれた少女の笑顔を、脳裏に浮かべた。
「どう、とは聞いたけれど、別に今すぐに答えが聞きたい訳ではない……」
「いや。俺、決めました」
リアスの言葉を遮って宣言し、目を開ける。紅髪の少女と視線がぶつかった。
その目を真っ直ぐに見返して、上条は言う。
「俺は、悪魔になりません!!」
「よろしく、トウマ……え、っ!?」
両手を広げて歓迎の意を表したリアスは、そのまま固まる。そんな彼女に向かって上条は続けた。
「よく考えたら俺、修学旅行で京都の寺とかに行ったりするから、そんな時に悪魔だと他の奴らと一緒に楽しめないし。それにレーティングゲーム？ってのもよくわからないけど危なそうだ。土地とか貰っても俺が指示なんかしたらあっという間に荒野になっちゃうだろうし。上条さんの夢は管理人さん的ホンワカお姉さんキャラと結婚することですから、悪魔にならなくてもいいかなーって」
真っ直ぐリアスを見て理由を言い放つ上条。最も心の中では別の理由も存在していた。
（アーシアや土御門達教会の戦士は人外を敵と考えてる。俺が悪魔になっちゃったら、アーシアを敵に回してしまうかもしれない。逆に、人間のうちは恐らく俺達は教会の庇護対象になれるはず。悪魔になって教会側と敵対するより、どっちとも付き合って双方の援護を受ける方が良いはずっ！）
そんな上条の心中には気付かず、リアスは上条を説得する。
「し、修学旅行の件は大丈夫よ。私が寺院の参拝許可証を貰うから。そ、それに土地だって専用のプロを付けるし、レーティングゲームだって慣れれば熱いバトルになるはずよ!!」

まさか断られるとは、という顔でリアスは上条を説得する。対して上条は頭をガシガシと掻きながら言う。
「それに、悪魔になったらうちにある大量のお土産が一気に牙を剥くという不幸に見舞われそうなんで、やめときます」
リアスは言葉をなくす。お土産というものは時たま、異常なくらいに神聖なものや、途轍もなく禍々しいものもある。それこそ、並みの悪魔なら触れるだけで消滅するようなものだ。しかもそれは魔力や魔法の力ではないので、幻想殺しで防げるとも限らない。それを理由にされたらこれ以上引き下がれなくなる。
「……眷属になりたかったらいつでも言っていいのよ。困った時に私達の誰かを呼べる魔法陣を渡しておくから」
魔法陣は一瞬で粉砕され、リアスは泣き崩れた。

特訓

「お、重い……」

上条はパンパンに詰まった登山用リュックサックを背負い、登山をしていた。

眷属になるならないは別として、体力や持久力等の戦う上での基礎力を身に付けなければ焼かれる、ということで上条はリアス達グレモリー眷属が行う山籠りの修行に誘われた。しばらくは補習もなくする事がなかった（夏休みの宿題をやろうという概念は持ち合わせていない）上条は、確かにその通りだと修行に参加していた。

そして今、上条は修行場である山頂のグレモリー家の別荘に向かっている。上条が持っている荷物は洋服や生活用品、携帯食料などなどが一週間分。それも一人分ではなく、

「とーまさん、頑張ってくださーい」

上で御坂に抱えられて空を飛んでいるアーシアの物も入っている。一人で留守番させるのは可哀想だと上条が無理を言って連れてきて貰っていた。今回は食事係として働くという。

「頑張って、トウマ君。あと少しだよ」

隣では木場が爽やかな笑顔で歩いていた。その背には上条の物以上に大きなリュックサックを背負っているが、彼は平気そうにペースを変えずに歩きつつ、時折止まって道端に生えている山菜を採っている。そんな事をしていてもいつのまにか上条に追いついており、木場がただの優男で無いことをひしひしと感じさせていた。

「何のんびりしてるの。早く行かないと日が暮れる」

そう行って横を通り過ぎるのは小猫だ。彼女は自分の身長と同じくらいのリュックサックを涼しい顔で背負っている。リアス曰く、小猫の駒である『戦車（ルーク）』の力の為らしい。『戦車』の駒はその悪魔のパワー、攻撃力や防御力を引き上げる力があるという。小猫はグレモリー眷属のたった一人の戦車なので、こういった場面で重宝されるらしい。

小猫の後をなんとか追っていくと、少し先に大きなラウンジが見え

た。中に入り、荷物を置く。木造の床が少し軋んだ。
「各自着替えたら外に集合、修行開始よ！」
〜〜〜〜〜〜
上条は男同士、という事で木場と組むことに。身体を解すストレッチを行った後、まずは上条の特訓をすることになった。
「じゃあまずはこれだね」
そう言って木場は剣を創り出す。
木場は悪魔に転生する前は人間だった。その為神が人類に与えたとされる神（セイクリッド・ギア）器を持っている。その名も『魔剣創造（ソード・バース）』。魔剣を創り出す神器だ。創れる剣は比較的自由度が高く、火や氷などの魔力を付与する事もできる。
最初に木場が創り出したのは、何の変哲も無い鉄の剣。上条はそれに右手で触れる。
「消え……ない！神器で作ったものなのに、幻想殺しで消せないのか!?」
これまでの魔力とは違い、打ち消せないという事実に驚く上条。木場は剣を撫でながら観察する。
「……そうか。この剣はすでに完成していて、これ以上の変化はしない。これはただの鉄剣だ。幻想殺しは神器が創り出したものであっても、すでに完成しているものを壊す事はできないんじゃないかな」
今度は銅で出来た剣を創る木場。刀身に触っても、やはり何も起こらなかった。
そこで木場は剣を創り出していく途中、半分ほど仕上がったところで上条に触ってみて、と声をかけた。上条が創りかけの剣に触れると、それらは粉々になって消えていった。
「……未完成のものならば壊せるようだね。じゃあ次はこういう趣向にしてみよう」
次に木場が創り出したのは炎の剣。橙の炎が外の風に煽られて揺らめいている。
炎の大きさを見て触るのを躊躇する上条だったが、どうにか意を決して右手を炎の中に突っ込む。炎は右手に当たった側から消えてい

き、刀身に触れると炎全てが消失した。
「付与（エンチャント）されている魔力は破壊できるけれど、剣自体は破壊できない……ってところかな？じゃあ最後」
　三つ目に創り出したのは、刀身が全て炎でできた剣。これは上条が右手で触ると、一瞬で鞘と柄だけになった。
「なるほどね。当麻君の幻想殺しは魔力には絶大な力を誇るし、付与（エンチャント）を破る事もできるけど、ただの刀剣には無力なんだ。でも、今回の相手は武器使いが多いから、ちょっと対武器の練習をしてみようか」
　言いながら木場が創り出したのは、木刀だった。黒光りするそれを上条が触ると、掌に硬い感触が残った。
「今から周囲を回りながら突いていくから、できるだけ避けてみてね」
　言うと木場はニコニコ笑いながら、上条の周りをゆっくりと歩く。半周ほどしたところで向かってきた突きを、上条は身体をくの字に曲げて避けた。すると木場は足を速める。先程より幾分か早い突きが、今度は腹目掛けてやってくる。上条は咄嗟に右手を出す。木刀は指に少し触れ、動きを止めた。というより、木場が寸止めしたようだった。
「これが剣だったら、今頃は手ごとお腹を刺されてるよ？」
　見つめてくる視線に息を飲む上条。一瞬の緊張の後、木場は更に高速で移動を始めた。今度は歩きではなく、完全に走っている。
「咄嗟に手が出るのは魔力相手なら正解だ。でも、今回の特訓は対武器。避けるか逸らすか、どうにかして攻撃そのものに触れないようにするんだ。やぁっ！」
　今度の突きは背中から！対して上条は少し遅れて振り返りながらも、左手を使って刀身を叩く！刀身は左に逸れ、服を少し掠めた。
「……これなら刃には触れてないって事で、オーケーじゃないですか？」
　しまった、という顔をしながら言う上条と木刀を交互に見て、木場は考える仕草をする。
「死角から迫ってくる武器の対処としては、間違っていないのかもし

れないね。なんせ、後ろからの攻撃を避けたとしても、振り向く間に次の攻撃が来てしまうし」
「じゃあ今のは……」
「この木刀を見てみて？」
木場が止めたままにしている木刀、それを見る。
上条が叩いた場所、それは刀身は刀身でも、本来の刀ならば刃がついている刃紋の方だった。
「当たり前といえばそうだけど、武器を相手取る時は殴り合いよりもダメージも身体への被害も大きい。だから武器を相手取る時にはそれに触れない、触れさせない事がまず重要なんだよ」
「触れない……か。触れないと魔法を消せない幻想殺しの戦い方とは真逆になりそうだ」
「そうだね。まだ時間はある、ゆっくり考えてみるといいよ。さぁ、修行を続けよう。だんだんと突きを増やしていくからね！」
「お、お手柔らかに……」
その後、特訓は日が落ちるまで続いた。

調理

一日目の練習を終えて外から帰ってきた上条。手を洗ってリビングへ向かうと、外に小さい炎が見えた。どうやら料理をしているらしい。上条は脱いだ靴を履き直して、外へ出る。

屋外キャンプ用の調理場では、御坂とアーシアがペットボトルを片手に話し合っていた。

「何やってんだ？」

上条が話しかけると、御坂の背筋がピンと伸びる。アーシアはそれを気にせず、こちらに笑いかけてきた。

「とーまさん、どうやらミコトちゃんはとーまさんのむぐぐぐぐ」

「ちょ、ちょっと！なんでもないから！別にあいつも関係ないし!!」

「……何やってんだ？」

アーシアの口を押さえにかかる御坂に再び質問する。

「何って、料理よ料理！見たらわかるでしょ？」

御坂はこちらを向き、服装を見せつけてきた。確かにアーシアは白いエプロンを身につけていて、料理をするというのが伝わってきた。そして御坂は……緑と紫で塗られた奇妙なエプロンを装備している。よくよく見ると緑の部分はカエルの顔の形になっていて、胸のあたりに目が、太もものあたりにヒゲが描かれてあった。

「……呪われて外せないエプロンとか？」

「この可愛さをわからないなんて、あんたもまだまだね」

肩をすくめる御坂から目を離し周りを見ると、二人の後ろのテーブルにはにんじん、玉ねぎ、じゃがいもとルーがあった。どうやらキャンプ飯の王道、カレーライスを作るようだ。上条の心が躍る。

「こういう風に屋外で作って食べるカレーって、美味しいよな」

「そうね、自然もスパイスになるっていう感じかしら？」

「？この森の中にも香辛料がある、ということでしょうか？」

アーシアの言葉に御坂が笑った。アーシアはわからなかったらしく、小首を傾げる。

「外で皆と食べるカレーは美味しいって事よ。アーシアさんは経験な

いの？」
「私はずっと教会にいましたから、そういったイベントはありませんでした……だから、今回は楽しみです！」
アーシアは目を光らせた。それを見て御坂も腕を捲る。
「よーし！じゃあ期待を裏切らないように、ミシュランも驚きの五つ星（レベル5）カレーを作ってやろうじゃないの！アーシアさん、頑張るわよ！」
御坂が力強く言い、アーシアも大きく頷いた。それを眺めていた上条も、手を挙げる。
「それなら俺も手伝わせてくれ！少しなら料理できるからさ！」
「え？別にいいけど、あんたエプロン持ってんの？」
言われて気づいた。上条家には男用のエプロンはない。アーシアが付けているのは母親が前に使っていたエプロンの一つだ。母、椎菜は料理の際は必ずエプロンを着けていたが上条はエプロンを着けずに料理していた。
「じゃ、じゃあこれ貸してあげるわよ！エプロンなしは良くないし！はい！」
そういって御坂が取り出したのは、緑とピンクのカエルが手を繋いだ手が胸元に描かれたエプロン。緑のカエルの方は御坂が付けているのと同じカエルのようだ。ヒゲはついていないが。
「そちらのエプロンも可愛らしいですね。日本のキャラクターは可愛い子が多いです」
笑顔で言うアーシアに御坂が食いつく。
「可愛いわよね！私の後輩は子供っぽいなんて言うけど、アーシアさんならわかってくれると思ってたわ！このゲコ太は日本を代表するマスコットなのよ!!ゲコ太は……」
力説する御坂。アーシアはそれをニコニコ笑って聞き入れる。上条はそんな平和な光景を傍目に見ながらエプロンを装着した――
～～～～～～
美味しいカレーが出来上がった。上条達は食事に舌鼓を打つ。
「いやー、肉がないと思ったら猪を狩ってくるなんて、上条さんには想

像もつきませんでしたよ」
　言いながら猪肉を頬張る上条。肉は噛みごたえがあり、ジューシーだ。テーブルには他にも焼き魚が並んでいた。木場が先ほど川で取ってきたらしい。なんでもできる先輩だと上条は思った。
「トウマ、特訓はどうだったかしら？何か掴めるものがあった？」
　リアスが問いかけてくる。上条は少し考え、答えた。
「祐斗先輩の動きは早いですけど、どうにか避けられるようになったと思います」
　リアスは祐斗に視線を投げかける。彼も笑って頷いた。
「当麻君は飲み込みが早くて助かります。避け方はまだ無駄が多いですが、頭よりも先に身体が動いてくれるようで、時には予想外の動きで避けたりされましたね」
「そう。じゃあその経験を活かして、明日は小猫と対人をさせましょう。大丈夫かしら、小猫？」
「……問題ありません。再起不能にしないよう、頑張ります」
　小猫の大きな目が上条を見つめた。それに気づいた上条が視線を合わせると、小猫は視線を逸らしてリアスの方に移動する。
「祐斗は明日は美琴と組んでちょうだい。朱乃は私と作戦について話しましょう。じゃあ明日は朝の六時から修行開始よ。今日の所は解散、自由時間に移行よ！お風呂の場所は祐斗と美琴がそれぞれ案内してあげてね」
　風呂、その言葉に上条センサーが反応した。急に真面目な顔になった上条に、木場が釘を刺す。
「覗きはしたらダメだよ、トウマ君」
「覗きなんてとんでもない！ワタクシ上条当麻は湯上がり女の子を愛でるジェントルマンであって犯罪行為はいたしません！」
「……サイテーです」

火の粉

二日目、早朝に起きた上条は服を着替えて外に出る。朝イチに行うトレーニングは山を降り、そして再び登山して別荘に戻るというもの。早速足早に下山するグレモリー眷属達の背を上条は追いかける。山はそれなりに高いが道がきちんと整備されている。そのため比較的楽に登り降りすることができた。四十分ほどで別荘に帰ってきた上条は山頂の空気を吸いながら、気を引き締める。まだこれはウォーミングアップ、本番はこれからだ。

シャワーを浴びたあと軽い朝食を取ると、また外に出た。小猫が指で方向を指示して走っていったのを見て、上条もそれに続く。山を少し降りるとそこには木や草が生えていない、土の広場があった。

「ここなら叩きつけられてもそんなに痛くない。さぁ、始めましょう」

小猫は手に指ぬきグローブを着け、構える。大きな目が上条を捉えて離さない。上条も小猫を真似て構えてみるが、どうにも形になっていない。

まずは小猫が足首をバネに跳んで一気に距離を詰める。その勢いのまま大振りのラリアットを撃つ！

「うわっと！」

上条はそれをしゃがんで避ける。小猫が空振ったのを見ながら、後ろに跳んで距離を取った。

これに小猫が不服そうな顔をする。次も小猫が突撃して、上条の顎目掛けて足を大きく上げた！上条は進路に入らないように、横っ跳びで避ける。すぐに体勢を整えると、小猫の方を向いて不恰好な構えを取り直す。

そんな上条に、小猫は

「今の私は隙だらけだった。何で攻撃をしてこないの？」

言われて上条はそれにハッ、としたような顔になる。今日の訓練は避ける事がメインではない。

「よ、避ける事に専念してたら、反撃を忘れてた」

「嘘。あなたには後ろに下がるという追加のワンアクションを起こし

た。それにあなたの視線は避けた後も私を追っていた。十分に反撃できる余地があった」
　上条は指摘されて言葉を詰まらせる。
「何もしてない女の子を殴るってのは、流石に気が引けちゃって……野郎との喧嘩なら上条さんも慣れっこなんですが……」
　言葉を聞いて小猫は息を吐く。予想通りの言葉が帰ってきた、そんな想いが表情に出ていた。
「あなたが今から戦おうとする相手……ライザー・フェニックス。彼は特に悪い事をしてるわけじゃない。私達にとっては迷惑な話だけど、冥界の事を考えればリアス部長が結婚した方がありがたいと思われている。実際、結婚の約束をしたのはグレモリー家とフェニックス家の家長で、それに反対してるのも公では部長だけ……
　フェニックス眷属には女の子も多い……というより女性しかいない。彼女達も特に何も悪いことはしていない。あなたは今の考えで、どうやって彼女らと戦おうとしているの？」
　上条は言葉が出ない。その目の前で、小猫は再び構える。
「私はこう思うようにしてる。
　私に、私達に飛んでくる火の粉は全力で払う！」
　大きく力を溜めて、豪快に回し蹴り！上条は上体を大きく曲げてなんとか避けた。
「私は今から、あなたを殴る。ボコボコにする。この厄介ごとを解決するには、あなたが私を倒す他ない。
　……私はあなた如きに振り払われるほど弱い火であるつもりはないけれど」
「……わかったよ」
　短く言い、上条はなんちゃっての構えをやめると拳を開く。地面に手を付き、膝も落とした。
　次の瞬間、土の塊が小猫に向かって飛んできた！小猫は右手でそれを叩き落とす……が、思いのほか柔らかかった土塊は多くは小猫のグローブに付いていた。小猫の顔が嫌そうに歪む。
「だーっはっはっは！どうだ、俺の必殺泥団子攻撃は！食らってもダ

メージ、叩いてもダメージという上条さんが考えた嫌らしいコンボ技を見よ！」
言葉と同時に上条は地面から土を取ると、小猫に向かって連続で土を投げていく！
それを見て小猫はため息を一つ吐き出すと、背中に翼を広げて空に飛び立ち、
「!?そうか、空を飛べぇ!?」
反応が遅れた上条に対し急転直下のドロップキックをお見舞いした。
「仙術を練った一撃、これであなたは立ち上がれない。……ちょっと大人気なかったかも。ひとまず、お昼までは休憩――」
「まだだっ……」
「っ!?」
上条は、立ち上がる。
「続けようぜ、時間もそんなにあるわけじゃない」
「……そういうセリフは一発でも当ててから言ってほしいけど」
それだけ言うと、小猫は再び構えた。

洗礼

修行漬けの一週間は流れるように過ぎていき、早くもレーティングゲーム当日となった。前日に帰宅し、身体を休めるようにとの言いつけ通りに早めに睡眠を取った上条は、当日も朝早くに目を覚ます。どうやら約一週間の合宿で早起きが身体に染み付いたようだ。設定しておいた多くの目覚ましが全て鳴らなかったせいで寝坊して遅刻する不幸とはおさらばできそうだな、と上条は笑う。

早起きしたはいいが、どうにも気持ち悪さを覚える上条は服を着替えると外に出た。町内一周を目標として走り出す。

ぐるりと町内を一周してなお余裕のある上条は外れの方まで走り出す。目的地は寂れた教会、初めて人外と戦った場所。勢いを落とさず一直線に向かうと、教会にすぐにたどり着いた。教会のてっぺんにある十字架が逆さだと気づいたが、見ないことにして帰宅しようとすると、教会の中に人影が見える。手を振ると向こうも気がついたようで、扉が音を立てて開く。中から髪がボサボサになった女が一人、気怠げに出てきた。

「何よ、こっちは今から寝るとこなのよ……」

「そうだったのか？顔が見えたからつい……悪い、レイナーレ」

堕天使事件で戦ったレイナーレ達四人は、お偉いさん方の話し合いがあった結果、この外れの教会で十字教の人間が監視しておく、と言うことになったようだ。

修道服のスカートをスリットのように破き、左脚を大きく露出させている彼女は怠そうに髪をかきあげる。

「でも、忙しそうで何よりじゃないか」

「何？この仕事山積み状態への皮肉？」

睨まれた上条は話題を変える。

「ちょっといろいろあって、上条さんはレーティングゲームってのに参加する事になったんですが……悪魔と戦うコツなんてないか？」

「光攻撃」

無愛想な言葉を受け止めて懐中電灯を持っていくことを検討する

上条に、はぁ、とため息を吐いてレイナーレはアドバイスする。
「洗礼されたもの。神聖な力は悪魔に効果が強いわ」
「へぇ！洗礼……レイナーレはできるのか？」
レイナーレは教会の頂上を指差す。
「十字教徒にでもやってもらうことね。アーシアにもできるんじゃない？」
「そうなのか！じゃあアーシアに頼んでみるよ！ありがと！」
礼を言い、上条は丘を降りる。
「死なないでよ。寝覚めが悪いからね」
背にかかる声に、上条は手を振って応えた。
～～～～～～
「お帰りなさい。ご飯にしますか？それともシャワーをお浴びしますか？」
家に帰ると、アーシアが朝食を作って待っていた。水のシャワーで汗を流すと、テーブルに着く。
「いよいよ今日……ですね」
「そうだな……年上のお姉さんからの頼まれごとだ、頑張って戦うよ」
アーシアは心配そうな顔をして、上条の目を覗き込む。上条はその目を見つめ返し、視界がしばらくの間、交錯した。やがてアーシアは少し表情を緩めると、自身の鞄を取って中から二つのものを出す。十字架のネックレスと、水の入った小瓶だ。
「十字架と、聖水です。お守りとして持っていてください」
「……！ちょうどお願いしようと思ってたんだ！ありがとう、アーシア！」
「正直心配です……悪魔の戦いに人間のとーまさんが参加するのは、やめてほしいと思ってます。でも、とーまさんならきっと帰ってきてくれるって、私信じてますから……ちゃんと帰ってきてくださいね。怪我は、治してあげますから」
「絶対に、帰ってくるよ」
～～～～～～
『開始のお時間となりました。このゲームの制限時間は人間時間の夜

明けまで。それでは、ゲームスタートです』
　昼には駒王学園に入れてもらい、別館にて待機していたグレモリー眷属は、それぞれが違った反応を見せる。
「皆さん、気をつけて行きましょう。絶対に勝って、部長の自由を！」
「やってやります」
「皆ぶっ飛ばして、すぐに終わらせてみせるわよ！」
「生きて帰れるように、頑張ります！」
「皆、ありがとう。
　私の可愛い僕達、さぁ、堂々と戦いに出向きましょう！」

分散

レーティングゲームは、悪魔達が作った仮想空間の中で行われる。今回のフィールドはライザーからのハンディキャップの意味も込めて、駒王学園の模造（レプリカ）だ。リアスは駒王学園のマップを空中に映し出す。

「今私達がいるのは、オカルト研究部がある旧校舎。ライザーの本陣は、新校舎の三階にある生徒会室。といっても、私に兵士はいないから近づく必要はないわ。新校舎はライザーの陣地だから、出来る限り近くのを避けるように」

細長い人差し指で新校舎にバツ印を書き、ツツッと下にずらす。指が止まったのは体育館だ。

「ライザーは兵士も多いから、昇格（プロモーション）するためにこちらの本陣を目指す者が多いはずよ。だから私達は分散して一つ一つ、道を潰すわ」

悪魔に転生する際には、王から駒が与えられる。その駒にはそれぞれ役割があり、転生したものはその力を与えられる。

『騎士（ナイト）』は速度、『戦車（ルーク）』は攻撃力と防御力、『僧侶（ビショップ）』は魔力がそれぞれ大幅に強化される。

そして『女王（クイーン）』は上記の全ての力を与えられている。逆に『兵士（ポーン）』はある程度強化はされるものの秀でて強くなるところはない。

しかし敵の本陣にたどり着き、王の許可を得ることで『兵士』は『昇格（プロモーション）』することができる。昇格すると『兵士』は『騎士』・『戦車』・『僧侶』、そして『女王』のいずれかの力を手に入れることができるのだ！

ライザー眷属は兵士が九人いる。それら全員に『女王』になられては困るため、グレモリー眷属は本陣に敵を入れないよう、その間の道を潰す作戦を取ったのだ。

「この本陣に向かうために敵が選ぶ道はいくつかあるの。

まずは新校舎・旧校舎両方と隣接している体育館。ここは相手も人数を使って取りに来るはず。対応するのは……

小猫、美琴。任せるわよ。体育館からこちらに渡らせないで」

「了解しました」「任せてください！」
小猫と御坂、発展途上コンビは頷くと、体育館を確保しに教室から出て行く。廊下を走る音が小さく上条にも聞こえた。
「二つ目のルートは裏の運動場。ただ運動場は旧校舎からの視界が良くて、私達に見つかって狙われる可能性も高いから、あまり選ばないとは思うけれど。来るとしたら数に任せて多人数で、という感じかしら？相手は十八人。フルメンバーで戦っているし、多少の無茶もしてくるかもしれない。その場合の対処も考えて、朱乃。あなたは空中で警戒を」
「はい部長。フェニックスの皆さんにも、たっぷり楽しんでいただきますわ♪」
朱乃はニコニコ笑いながら、窓を開けて出て行く。
「そして残ったルートは二つ、旧校舎からでは見通しの悪い校庭から来るルートと、運動場の近くにある森の中から来るルート。祐斗、当麻。あなた達は今から森の中にトラップを仕掛けて来てもらうわ」
リアスは空中からもう一枚地図を取り出すと、上条に向けて飛ばす。上条が右手で掴む前に、木場が高速で近づいてハシッと地図を手にした。
描かれてあるのは森の全体図。その中にいくつかマルがつけられている。その場所にトラップを仕掛けろ、ということだろう。
「トラップは魔力を使ったもの、使っていないもの、共に十個ほど用意してあるわ。どれも引っかかるか、破壊されるとと私達に……当麻以外の全員に情報が来る。そうしたら、出来る限り森を離れなさい。トラップを仕掛け終わったら、校庭側で待機。敵が来たら迎撃するように。以上よ」
「了解しました」「わ、わかりました！」
木場と上条はテーブルの下にある小型のトラップを持って、駆け足で部室から飛び出した。
一人残った王は、玉座で脚を組み替えた――
～～～～～～
小猫と美琴の二人は体育館に突入する。幸い敵はまだいない、何か

仕掛けられるかと思ったその時、新校舎側の扉が彼女らに向かって吹き飛んでくる!!
「……」
小猫は御坂を隠すように立つと、両手を前に出し、勢いよく飛んで来た扉を掌で受け止めた!
「一人くらい仕留められれば良かったんだけど、どうやらそこまで甘くはなかったようね」
付いているはずのものが無くなり違和感のある入り口、そこにいるのは四人の女性。
その中でもリーダーらしい露出の多いチャイナドレスを着た女が、悠々とこちらに近づいてくる。体育館の中央にたどり着くと、彼女はピタッと止まり、構えた。
「ライザー様の『戦車(ルーク)』、雪蘭(シュエラン)。リタイアしたい方からかかってきなさい。両方でもいいわよ?」
「っ!あんまり舐めるんじゃないわよ!」
御坂が電気の塊を飛ばす!が、それは雪蘭の後ろから出てきた小柄な女の子の棒に阻まれた。彼女はどうやら棒術の使い手のようだ。
残った二人の女の子、どうやら双子らしい同じ服を着た似た顔の少女は、自分たちが持っている武器、チェーンソーに火を入れた!危険な音が、体育館にこだまする!!
「……大変そうな敵。骨が折れそう」
「初めてのレーティングゲームなんだし、全力でやったろうじゃないの!」

電撃

チェーンソーを持った双子が、小猫と御坂に突撃を仕掛ける！大きく振られた刃を、二人は最小限の動きで避ける。
「美琴はこの二人をお願いします。私は戦車を！」
小猫は手を床につけ四つん這いになると、両手を使って低い姿勢のまま前に出る。右へ左へ動きながら、敵戦車に迫り行く！
「それくらいの揺さぶりで私が動揺するとお思い？喰らいなさい！」
雪蘭の拳が小猫の顔面目掛けて飛ぶ！それを小猫は首を傾けて避けるが、頬に一筋、線が入った。
「それでも避けた！ならば攻めさせて……っ!?」
雪蘭は放った拳に引っ張られるように、小猫の横をすり抜けて行く。慌てて方向変換する小猫。その背後に、兵士の少女の棍が迫る！
「気配を読めば、丸わかりです！」
小猫は即座に両脚で棍を掴み、両腕の力を使って勢いよく宙に跳ぶ！思わぬ動き、そして戦車のパワーに兵士の少女から棍が離れる。小猫は空中で棍を両手に持ち変えると、兵士に棍の一撃をお返しする！
脳天に直撃を喰らった兵士は倒れ、足元から光になって消えていく。
『ライザー様の「兵士」、一名リタイア』
「あーもーうるさい！アナウンスも聞こえないじゃないの！」
御坂は両手に電気を集め、周りを飛び回る双子のチェーンソーに向かって電撃を飛ばす。
「無駄だよー！この武器は私達の魔力で動いてるんだから！」「電気で壊れたりしないんだから！とっとと切られちゃえー！」
大雑把に振られる刃を余裕を持って避けながら、御坂はスカートのポケットから小袋を取り出す。それを双子の片方に投げつけた！
「そんなの切っちゃうよ！……ぶわっ!?」
切りつけられた小袋、その中から飛び出したのは砂！
「掛かったわね！喰らいなさい!!」
御坂は砂を被った少女に、電撃の槍を飛ばす!!

「させないよ！」
が、相方がチェーンソーを間に入れ電撃を受け止める！電撃はチェーンソーにぶつかり霧散し、その間に砂を被った少女はハンカチでそれらを全て拭った！
「小細工の目くらましを喰らっても、立ち直るまでもう一人がカバーすればいいんだよ！それが私達のツーマンセル戦法！」
「もう小細工は効かないよ！大人しく切られちゃえー！」
またも御坂に刃が迫る。御坂は後ろに真っ直ぐ逃げるが刃はそれを追いかけてくる！御坂は手を伸ばし、双子の顔面に向かって電撃を放ったが、双子はチェーンソーで防御する！
「電気がうざったい！その手をぶった切ってあげる！」
手に向かうチェーンソー！御坂は腕を引っ込められない！そして手が届き――
「えっ!?」「どうして!?」
刃の回転がピタリと止まった!!
御坂は止まった二つの刃を掴み、重ねる。その瞬間刃が再び動き出し、お互いの刃を削っていく！
「さっきあんた達が切った袋は砂鉄入り！それをチェーンソーに浴びせ、電撃で砂を刃の出入り口に固定して、回転を数秒止めさせてもらったわ！」
御坂の手元に砂が集まり、剣が形成される！
「今までの攻撃で服の端がビリビリなんだから！お返しよ!!」
砂鉄の剣で、一閃！双子は同時に光となった。
『ライザー様の「兵士」、二名リタイア』
「よし、小猫先輩行くわよ!!」
アナウンスを聞くとすぐに、御坂は外に向かって走る！小猫も組み合っていた雪蘭を力で剥がし、外に全力で走る！
「ま、待ちなさい！急にどこに……っ!?」
突如鳴り響く轟音！その音源である真上を見た瞬間、雪蘭の視界が光で埋まり……
遅れてやってきたゴロゴロという破裂音、それが鳴り止む頃には雷

が雪蘭を完全に呑み込んでいた。
崩壊していく体育館、それに巻き込まれるギリギリで脱出した発展途上コンビは、拳を合わせる。
「さぁ、急いで戻りましょう。もしかしたら上条が抜かれてるかもしれません」
「リアス部長に危機が有ったら大変だし、急ぎましょう！」
小猫が一足先に、入り口から飛び出し……

カチッ、という無機質な音、そして爆発が起きた。

小猫が空に舞う。その身体が光となって消え行くのを、御坂は何が起きたかわからず呆然と見上げた。
「あら残念、二人いたのね。まぁ、あの四人相手に一人で相手出来るような方は、こんな攻撃でやられはしないでしょうしね」
その背に掛かる嘲笑。空中から御坂を見下すのは、ライザーの女王、ユーベルーナ。
御坂が地面に電撃を流すと、体育館の近くから遠くまで、合わせて十数箇所で爆発が起きる。
「何よ、こんなに罠ばっかり仕掛けて。そんなに私達が怖かったの？」
御坂が睨むとユーベルーナは怖い怖いと口元を扇で隠す。
「生き残ったのは幸運だったのかしら？不幸だったのかしら？次はあなたを爆破してあげるわ」
「じょーだん！私がそこから叩き落としてやるわよ!!」

罠

「おチビさん、あなたは私のお相手には役不足ですわよ」
　言いながら手を大きく振るうユーベルーナ。すると辺り一帯に爆発が起きる。御坂は巻き込まれないよう、悪魔の翼で空に舞う。
「これで地雷は喰らわないわよ！」
「ふふふ、私の爆弾が地雷だけとお思いで……っ!?」
　ユーベルーナが何かに気づいて横に移動する。動きに付いてこれずその場に残ったティアードスカートに大きな雷が触れ、長く伸ばした裾を大きく裂く。
「御坂さんでは役不足、それなら私ではいかがでしょうか？」
「『雷の巫女』……リアス・グレモリーの女王。確かに、私の相手に相応しいお方。あなたと戦ってみたかったの」
　御坂とユーベルーナの間に割って入った朱乃。二人の女王は火花を散らす。その後ろで御坂は憤り、声を荒げる。
「わ、私を無視すんじゃ……」
「御坂さん、あなたは私の代わりに祐斗くんと当麻くんのもとへ向かいなさい。ここは私が引き受けます」
「……！わ、わかりました！」
　本来朱乃は体育館を使い物にならなくした後、木場と上条のいる森の上空に行き、同じように森も壊滅させる予定だった。もっとも火力のある朱乃の一撃で固まった敵を一掃、これを繰り返すのがもっとも効果的だと思っていた。しかし、敵女王を抑えられるのは朱乃しかいない。
　御坂もここで自分が戦列に加わればどうなるか、わかっていた。自分の強さを信じられたことは一度たりともない。自分の神器はまるで役に立たず、禁手（バランス・ブレイカー）にも至っていない。魔力で作った電気よりも、朱乃の雷の方が強力だ。だから、今ここにいてもできることなど何もない。そう思った。
　御坂は朱乃の背に期待の声をかけると、踵を返して森へと飛ぶ。背後から轟音が響くのを聞き、歯噛みした――

～～～～～～～

「これで全部設置完了、っと」

上条は左肩を揉みながら、一息つく。二十の罠は全て仕掛け終えた。体育館での戦闘も作戦通り進んだであろうことは、フィールド全体に流れるアナウンスと、空を劈く雷鳴が証明している。となると次は校庭だ。木場を先頭に移動しようとするが、ここで先導役が耳を押さえる。どうやら他メンバーから連絡が来ているようだ。

「わかりました……こちらで、対処します」

言って、木場は足を止めた。かなりのペースで走って木場に付いて行っていた上条は慌てて止まろうとし、転倒する。

「どうやら、朱乃さんはこちらの援護に来れないらしい。この森を抜けて来る敵は、僕達で対処する他ない」

起き上がりざまに浴びせられた言葉に、上条は固唾を飲み込む。

「それは、戦えって事ですよね？」

「そうだ。こちらに来る戦力を、相手取らなければならない。美琴ちゃんが援護に来ると言われたけど、敵がたどり着く方が早いだろう。僕達二人で対処するんだ」

「怖く……ないんですか？」

木場はニコリと笑って言う。

「僕はリアス部長の騎士（ナイト）だからね。むしろ嬉しくてたまらないよ。やっと、部長に少し恩を返せるんだ」

真っ直ぐに伸びた長い細剣が、木場の手に握られた。

森の中に入ると、中央部辺りに位置どる二人。罠が見える位置で待機する。木場は耳を押さえて罠の反応を確かめる。新校舎側の森の入り口から、順々に罠が壊されて行っているらしく、だんだんとこの中央の罠に近づいてきているらしい。

数秒後、目の前の罠が破壊される！そして罠があった場所に、メイド服の女が現れた！

「はあぁぁぁっ!!」
木場が木の陰から飛び出し、メイドを一気に突いていく!!メイドは反応が遅れ、数撃喰らって吹き飛び、光となった。
メイドを吹き飛ばした木場、そこに森の奥から炎が迫る！咄嗟に上条が前に飛び出し、炎を右手でかき消す！
霧散した炎球、その後ろから、二人の女剣士が飛び出した！木場、そして上条に風の斬撃を放つ！
木場は真正面から受け止め、上条は右手で弾く。それを見て敵の女剣士の片割れがニコリと笑い、構える。
「私はライザー様の騎士、カーラマイン！リアス・グレモリーの騎士よ！いざ尋常に勝負！」
言って、木場に突撃する。二人は火花を散らしながら、森の奥に消えていった。
「カーラマインの悪い癖だ……正々堂々やら騎士道やら、そんな言葉を重んじる。
だが私は……私達はそんな真似はせん」
もう一人の女騎士、その背後からさらに四人の少女が現れる。ネコミミにネコ尻尾をつけた二人の少女、顔の半分にだけ仮面をつけた女性、そして。
「先程の火球がかき消されたのは驚きましたが、この数相手にも同じ真似ができますかしら？」
お姫様のようなドレスに身を包み、頭の両側にドリルのような縦ロールをつけた金髪の少女。口振りと態度から、この集団のリーダー格であることがわかる。愉しそうに目を細めながら、少女は淡々と告げる。
「総員、攻撃を開始しなさい」

檻

「総員、攻撃を開始しなさい」

ドレス少女の言葉に、仮面の女とネコミミ少女達が上条に攻めかかる！女騎士だけはドレス少女を守って、少し遠目に上条達を眺めている。

まずは仮面の女が上条に仕掛ける。狙いは脳天、一撃ダウン。上条はそれを察して、避ける。大きな動作を空振り隙だらけの仮面女、その顔面に拳を叩き込む、その直前。

背中に電流が走ったような感覚。そして焼けるような痛み。思わず上条も動きを止める。そこに仮面女のビックブーツが飛び出した。上条の身体がくの字に折れ、そのままノーバウンドで近くの木まで吹き飛ばされる。上条は一瞬意識を失ったが、背中から木にぶつかった痛みに目を覚ます。

「…っ、がああっ!?」

意識を取り戻した上条は、即座に真横に飛ぶ。直後、仮面女の拳が木の幹を捉える。木は殴られた箇所を中心にヒビ割れ、そして折れた。

一息つくのも束の間、今度は左腕が抉られる。一瞬で腕に付いた三本の線から、血が滲み出て土に滴る。

（仮面女の攻撃を避けたら、次は斬撃が来ている……でもあの騎士とお嬢様には動きがない。となると、あのネコミミ達か！）

周りを見渡すと、やはりネコミミ少女二人の姿が見えない。

確認したところに、またもや仮面女の拳が飛ぶ！上条は咄嗟に前転して仮面女から逃げ、すぐに立ち上がり、拳を握った。

（仮面は隙だらけ……この穴を埋めるように、あっちは攻めて来る……！）

上条は仮面女に背を向けて、全力で空を殴る！それに吸い込まれるように、ネコミミ少女の片割れが飛び込んで来た！

「にゃ!?にゃんで……ガッ!?」

上条の拳は少女の頬を突き刺す！そのまま殴り抜けると、少女は錐

揉み回転しながら吹き飛んでいく。その脚が光に包まれていくのを上条は見た。
「取った……づっ!?」
背中に鈍い痛みが広がる。最初に喰らったのと同じ斬撃。となると次に来るのは仮面女。彼女は両腕を前に出す！
「ほう、まだ耐えるか！ならこいつを喰らえ！」
言葉と共に放たれたのは巨大な魔力球！迫り来るそれに、上条は右手を突き出す。魔力球は右手に触れた瞬間、消滅した。
驚く仮面女を尻目に、上条は急いで後ろを向く！
（あっちの攻撃が終わった、なら次は背後っ！）

「流石にそこまで単純じゃないわよ、ばーか」
左側面からドロップキック！もろに脇腹に喰らった上条は、土の上を転がる。
「まさか一発でリィがやられるとは思わなかったけど、イザベラとニィがいればこの挟撃は機能する。
そしてもう同じ轍は踏まない。あんたがどこまで対応できるか見ものだにゃ！」
ネコミミ少女……ニィはそう言うと、木の上に消える。それを目で追う間も無く、仮面女……イザベラが拳を振るう。バックステップで避け、上からの攻撃に注意する上条。その耳に風を切る音が聞こえてくる。
考えるより先に、右手を後ろに出す。巨大なブーメランのような風の刃が上条の右手に当たり、弾けた。
その先に視界を向ける。そこにいたのは司令塔のドレス少女。そして、巨大な剣を振るう騎士。
「受け止めるのは……止まるのはマズいっ！」
再び飛んでくる刃を、上条は紙一重でしゃがんで避ける。トレードマークのツンツン頭の先端が、上条から離れていった。
屈んだ状態から脚をバネに後ろに跳ぶと、先ほどまでいた地面が、爪に抉られる。

体勢を立て直そうとする上条。その腹をイザベラの長い脚が蹴り飛ばす。肺の中の空気が全て飛び出す感覚に陥りながら、上条はまたも大きく吹き飛ばされる。二回、三回と地面をバウンドして、太い木にぶつかってやっと停止した。
「蹴った方向はちょうど良かったな。もうここまで来れたよ」
追いついてきたイザベラの言葉に、上条はその視界の先に目をやる。
そこにあったのは、駒王学園旧校舎。吹き飛んだり後退したりするうちに、いつの間にか本陣まで敵を連れてきてしまっていた。
愕然とする上条。その耳にさらにアナウンスの音が響く。
『ライザー様の「騎士(ナイト)」一名、及びリアス様の「騎士」一名リタイア』
「あら、カーラマインは相打ちですか?単騎で突っ込んで素人と共倒れとは……とはいえ、リアス様の駒を一つ減らしたのに変わりはありませんわ」
ドレス女がニコリと上条に笑いかける。
「ここに至っては、あなた方にもはや勝ちの目は万に一つもございません。もともとこの話は両家の縁談の可否を取り決めるもの、遺憾も遺恨も残したくはありません。我が兄はあなたを燃やしたがっておりましたが、私はあなたをこれ以上痛めつけるつもりはございませんわ」
「我が…兄……?」
「あら失礼、名乗っておりませんでしたわね。私はライザー・フェニックスの妹、レイヴェル・フェニックスと申します。以後お見知り置きを」
レイヴェルはスカートの裾を摘んで挨拶する。この戦場に似合わないほど上品な振る舞いに、意図が読めず上条は戸惑う。
「俺に……何をさせたい……?」
耳を傾けた上条に先ほどよりも強い笑みを浮かべながら、レイヴェルは優しく告げる。
「何も。あなたはただ、私達に降伏して、棄権(リタイア)していただければ良いのです」

決断

「他の駒と違ってあなたがそのような傷を負ってもリタイアできないのは、あなたに転送システムが反応していないから、でしょう。おそらくあなたは無意識的に魔力を打ち消している」

レイヴェルは炎の矢を放つ。その速さに反射的に右手が前に出た。掌に触れた瞬間、炎の矢は霧散する。

「なるほど、その右手に触れると魔力を消せるのですか。その能力……神器かしら？その為に転送されない。となればタネの割れたあなたが取れる手は、ただいたぶられながら王が取られるのを待つのみ。それではあまりにも可哀想だと思いましたの。

あなたがここで棄権する、とそう言ってくださるなら、私達はあなたに一切の攻撃を加えませんわ。私達としても最優先は王。ここで時間を食っては先を越されてしまいますので」

上条はレイヴェルの表情を見る。彼女はにこやかに笑っていて、その裏が読めない。

「先を越される、なんて余裕面してるが、うちの大将だってそんなに弱くないぜ？お前らがここで止まってる間に、そっちのチームが全滅してるかもしれねぇ」

その言葉にレイヴェルはクスクスと音を漏らす。

「なるほど確かに、リアス様の滅びの魔力を使われては私達とは別に進んでいる兵士達が女王（クイーン）に昇格（プロモーション）し、束になっても勝てないでしょう。

ですが、彼女は我が兄には勝てませんわ。いえ……不死鳥（フェニックス）に勝てるものなど存在しない、と言った方がよろしいかしら？」

悪魔の最上級貴族、フェニックス家。その身体は炎で出来ており、その生命は寿命を全うするまで消えはしないという、不死身の一族。

リアスは事前にライザーについてそう語っていた。

「我らフェニックスの不死の炎はリアス様の滅びの魔力とは圧倒的に相性がお悪いのですわ。身体が一片でも残っている限り炎と共に再生する。それがフェニックス。リアス様が兄を存在ごと消滅させる

気であれば可能性は幾らかあるかもしれませんが、今回は両家の交友もある手前、そのようなことはできない。
となれば我が兄は無限に再生を繰り返します。それが続く限り……王が蘇る限り、我々に負けはありませんの」
「そんな……じゃあ俺たちは最初から……」
乾いた喉から出る掠れた声を、レイヴェルは強い言葉で肯定する。
「あなた方は詰(チェックメイト)みですわ。早く楽になりなさい」
レイヴェルに向けられていた右手が、ダランと下がった。
少しして、上条の口が開き、ポツリポツリと言葉が流れ出る。
「塔城に言われたんだ……この戦いは火の粉を払うようなもんだって。俺自身が、自分を守るために戦うんだって、そう思って戦ってきた。その結果がこれだ。初めから負ける為の戦いで、多勢に無勢でぶっ潰されてK．O．負けかここで尻尾を巻いて逃げるか選ぶハメになっちまった」
折れた。レイヴェルは心の中でほくそ笑む。
しかし、その心に冷や水を浴びせるように、上条の声は続く。
「こうなったのも……いや、この戦いが始まったのも、俺の所為(ふこう)だ。全然人ごとじゃない。
なにより、ここでアンタの兄貴を倒せばお姫様の結婚は破棄、だろ？そうなれば俺への依頼は達成だ。
ここでお前らをぶっ飛ばして、不死身男をぶっ倒して、そして二人に土下座して、それで全て解決。
そうしないと、ダメなんだ。いつもの日常(ハッピーエンド)を迎えるには、詰んでる盤を土台ごとひっくり返してでも、やらなきゃいけないんだ！
そうしないとあの天然お姫様や、お姫様を守るって言ってた先輩や同級生や、俺を見送ってくれた居候に、顔向けできないだろうがよ！」
拳が握られているのを、レイヴェルは見た。彼女は仲間達に、目で合図を送る。
「それが答えならば、残念という他ありませんわ。今のあなたでは台をひっくり返す力さえ残っていないことに気づいていないのは、もはや哀れ。

しかし、その王に対する忠誠心は賞賛に値しましてよ」
イザベラが上条の真正面からまっすぐ、勢いよく飛び出す。狙いは上条の顔面、一発で意識を刈り取る事。同時に背後からは、ニィの爪牙も迫る。
上条はただ真っ直ぐ、目の前の敵を見た。一番最初と同じ、後の事を考えない全力のストレート。大振りで避けやすく反撃も容易いが、おそらく後ろから何度も自分の肉体を抉った爪が来ているだろうとわかる。どちらかを対処しても残った方にやられるだろう。
「逆に言えば、背中の攻撃を喰らう覚悟があれば正面をぶっ飛ばせるって事だ!!」
眼前に広がっていく拳を、ギリギリで避け、同時にカウンター気味に彼女を狙う。わずかに掠った頬から、紅い血が滲んだ。
避けられてなお余裕を持った表情のイザベラ。上条にもその意味はわかった。背後に迫る気配、しかしそれを上条は無視する。

「たった一人に大勢で、タカってんじゃないわよ!!」
バリッ、と空気を裂く電撃の音が上条の耳に届き、イザベラの仮面に隠されていない、晒された方の顔が驚愕に歪む。上条はその顔面に向かって、全力の一撃を叩き込んだ。
『ライザー・フェニックス様の「戦車(ルーク)」一名、「兵士(ポーン)」一名リタイア』

不意

「ちょっとアンタ！傷だらけじゃないの!?何でこんな傷で強制リタイアされない訳？」
旧校舎の方から走ってきたのは、リアスの僧侶（ビショップ）御坂美琴。上条は命拾いした、と内心ホッとする。一人よりも二人の方が、心強い。
「体育館の作戦は成功したけど、相手の女王に襲われてね！そっちは朱乃先輩が引き受けてくれたけど、今度は敵兵士達と鉢合わせちゃって、遅くなったわ。アンタは休んでて、私が終わらせるわ！」
残った敵から上条を守るように間に割り込みながら、御坂は申し訳なさそうに謝る。
「途中でぶつかったやつらはどうしたんだよ？脱落は聴いてないぞ」
「安心して、もう終わるわ」
上条がその言葉の意味を聞き返そうとした時、アナウンスが半分以上更地となった森林に響く。
『ライザー様の「僧侶（ビショップ）」一名、「兵士（ポーン）」三名リタイア』
御坂はニッコリと笑って言う。
「さすがは私達の王、よね！
これで敵はあと四人！味方もあと四人！互角（イーブン）にまで持ち込んだわよ！」
バチバチ、と御坂の身体から電気が漏れる。それらはだんだんと形を為し、彼女の掌で槍の形に変わった。
「そこのヘンテコ髪の剣士！私がぶっ倒してやるから覚悟しなさい！」
レイヴェルの護衛に入っていた騎士（ナイト）……シーリスは一連の流れに驚く。ネコミミ姉妹とイザベラの連携は（接待レーティングゲームを除いて）抜け出されたことはない。それがただの人間相手に全員をリタイアさせられ、強引に抜け出されたのである。シーリスは驚愕と共に、賞賛を送りたいものであると思った。
（しかして抜け出した人間はもうボロボロ、救援が来なければニィの一撃で確実にダウンしていたはず。もう戦力にはなるまい。

こちらには女王（ユーベルーナ）が立っている。そして王は恐らく、滅殺姫を捉えた。ここで不穏分子を排除できれば、勝利は揺るがない…）

そう考えて、ハッと気づく。

『敗北』、その可能性を自身が考えてしまっている。

「…っ！我が名はシーリス！ライザー様の騎士の一人！完全なる勝利の為に、お前達の首を貰う！」

嫌な思考を取り払うように、シーリスは高らかに告げる。その名乗りに答えるように電撃が一筋、シーリスに向かって突っ込んでくる。

「こんな小細工は効かん！」

シーリスは持っている大剣で電撃を弾くと、二の矢を放とうとする御坂に突撃する！大剣の重量を、御坂は電気の槍を両手で支えてなんとか受ける。力で押し切ろうとするシーリス、それを拒む御坂。そこに――

「そのまま動きを止めておきなさい、シーリス！」

レイヴェルが巨大な火の玉を創り出し、御坂達に向かって飛ばした！

「っ!?ちょっと、こっちにはあんたの仲間もいるのよ！一体何考えて…」

「これは『犠牲（サクリファイス）』戦法、立派なレーティングゲームの戦法だよ。うちはこれが十八番でね。悪いが私と一緒に消えてもらう！」

御坂は回避を一瞬考えたが、躊躇する。御坂が避けの一手に回れば、騎士のスピードを持つ相手がすぐに追いつき、叩き斬られるだろう。しかし、電気で反撃する時間もない。火の玉は今にも自分達を？み込もうと迫っている。

（何を選択するべきなの…？どうしたら、この場を無事に……っ）

炎によって照らされ、シーリスの後ろに影ができていた。自分の影法師の後ろにもう一つ、ツンツン頭の影法師が立っている。

「……任せたわよっ!!」

御坂は槍を支えながら、電気の魔力を練っていく。火の玉との距離

はもう一メートルもない。シーリスの力が少し緩んだその機を逃さず、御坂は電気の槍を……消した！

御坂は急いで横に小さく跳ぶ。支えを失った大剣が地面に叩きつけられるのを見ながら、御坂はスカートのポケットからコインを取り出す。

ピン、と親指で弾いたコインが静かに宙に舞うのをシーリスは見た。

「攻撃で火の玉を掻き消そうと言うのか!?無駄だ！ここまで迫った炎を攻撃したところで無数の焔となって我々に降り注ぐのみだ！」

迫ってくる炎から目を背け、明るく照らされた御坂に攻撃を加えようとするシーリス。

その御坂の姿が、急に暗くなる！……いや、炎を出す前に戻ったのだ！

シーリスが振り向くと、あれ程赤々と燃えていた火の玉はすっかりとなくなっていた。そして、

「なん……っ！お前！」

シーリスから少し離れた左後ろ、火の玉があったら僅かに触れている、そのくらいの位置に上条当麻が立っていた。前に差し出した右手を下ろし、逃げるように後ろに走っていく。

「待てっ……いや、それより！」

火の玉と上条に気を取られてしまったが、自分の戦っていた相手はすぐ側にいる。

そして彼女は先程、何かを行なっていなかったか？

地面に少し埋まっていた剣を土ごと抉り取り、シーリスは力任せに大剣を薙ぎ払う。が！

それより僅かに早く、コインが再び御坂の手元に収まっていた。御坂は親指に力を込め、それを一気に弾く!!

今まさに大剣の切っ先を御坂に届けようかというシーリスの腹部に、重い衝撃が走る。

「ごっ、がああああああああぁぁぁっ!?!?!」

衝撃をその場で抑えきれず、地面から離れた身体を吹き飛ばしたコインが連れて行く！その直線上には、レイヴェル・フェニックス!!
「な、何ですって!?」
レイヴェルは驚く。先程まで離れた位置にいたシーリスが、光に包まれながら目の前に現れたのだから！
「電力をありったけ込めた超電磁砲（レールガン）、受け取りなさい!!」
言うよりも早く、レイヴェルとシーリスの身体が衝突し……レイヴェルの右肩から先が持っていかれた!!
「……驚きましたわ、レーティングゲームに参戦して早十数度……肉体を失ったことはありませんでした。
ですが！我が兄がそうであるように私もフェニックス！これくらいの再生、容易ですわ！」
リタイアのアナウンスを遮るほどに燃え盛る炎の音と共に、レイヴェルの右腕が再生される。そのまま両手を前に突き出し再び炎を出す、その時!!
「どぉりゃあああああああ!!」
背後の木から飛び出してくる影が一人、上条当麻だ！
「っ、あなたの右手に触られれば、確かに再生はうまくいかないかもしれません。ですが！」
レイヴェルは地面に草花に火をつける！レイヴェルの足元に炎の柵が現れた！
「戦いの場に木々が生い茂っているこの地を選んだのは失敗でしたわね！このようなトラップをいくらでも作れるなんて、私にとっては絶好の狩場ですわ！」
（足元にある炎、それを彼が消すためにはしゃがんで炎に触らなければならない。しかしそれでは走った勢いが消されるし右手で叩けなくなる。彼はそのような愚を犯しませんわ。
となると彼が取れる手は一択、柵を飛び越えてその勢いで私を殴りつけることのみ。そして、そう来るとわかっていれば対処も容易い！）
レイヴェルは既に、宙に火の粉を散らしていた。魔力で作った火の

粉は、レイヴェルの任意でいつでも爆発させることができる。女王《クイーン》ユーベルーナの爆発魔力の模倣だった。
（あなたが地を離れた瞬間、上空に舞わせた爆弾があなたを焦がす！全方位の攻撃はあなたはきっと対処できない！これまでの傷がそう物語っていますわ！）
飛び出してきた上条はレイヴェルにどんどんと近づいていく。そして炎の柵に辿り着き……
地に右手をつけ、炎を消した！
「な!?なぜ跳ばないの!?それでは攻撃できないはずっ!?」
驚愕するレイヴェル、その顔面に拳が迫っていた。右手ではない。左手だ!!上条は地面に手をつけ、側転の要領で勢いよくレイヴェルを殴った!!
レイヴェルは大きく吹き飛ぶ！同時に感じたのは、重い衝撃と鋭い痛み！欠損にも痛みを感じずただ再生するだけだった頬から送られてくるのは、ＳＯＳの電気信号！
そのまま木に叩きつけられたレイヴェルには、なぜ殴られたのか、なぜ痛みを感じたのかわからない。追撃のために迫ってくる上条に怯えながらも、必死に頭を回転させる。
「まさかあなた、左手にも神器を……」
頭に過ぎった考えを、上条は否定する。
「そんなんじゃねーさ。ただ、悪魔に効くっていう聖なるモンを手に付けてぶん殴っただけだ。リアクションからして、どうやら不死鳥にも効果があるみたいだな！」
上条の左拳が再び眼前に迫る。レイヴェルは彼の拳に十字架のネックレスが巻きつけられているのを最後に見た。
『ライザー様の「僧侶」、一名リタイア』
レイヴェルが光となったのを確認した上条は、膝を地に落とす。集中が途切れた途端にダメージが戻ってきたのだ。御坂がすぐに駆け寄ってきた。
「大丈夫!?……傷は増えてないみたいね。やるじゃない、アンタ！フェニックスを倒すだなんて！

お陰で状況はだいぶこっち有利だわ。あとは朱乃先輩が相手の女王を倒せば――」

ドン、という音が遠くで響いた。

『リアス様の「女王」、一名リタイア』

「な、朱乃先輩が!?じゃあ今の爆発は…」「ええ、私の魔力ですわよ」

空からの声に反応する前に、御坂が吹き飛ばされ光と消えた。

「先程の爆発は時限式でして。雷の巫女様にはお二方の気をそらすために今まで少々倒れていただいていたのですわ」

空にいたのはライザーの女王、ユーベルーナ。彼女は上条に向かってお辞儀をする。

「御機嫌よう、勇気ある人間のお方。我が主が新校舎の屋上にてあなた様をお待ちです。そちらの王もご招待しておりますので、ぜひお越しくださいませ」

それだけ言うとユーベルーナは再び飛び立つ。一人残った上条は、拳を地に叩きつけた。

面

新校舎は三階建てで、登るのが大変だ。身体が悲鳴をあげるのを精神でなんとか引っ張って、上条はやっと目の前にしたドアノブに手を伸ばす。月光のみが場を照らす屋上、そこに彼女はいた。

「当麻！」

目を潤ませながらこちらに駆け寄ってくるのはグレモリー眷属の主人、リアス・グレモリー。そして、その後ろからやれやれと言うように肩をすくめる男が一人。

「おいおい、未来の夫を放置して人間に迫るなよ……

よく来たな、魔術師。レイヴェルとぶつかった時は残念だと思ったが、まさかアイツを乗り越えてくるとは」

ライザー・フェニックス。上条が倒さなければいけない相手は、落下防止のフェンスから身体を離すと、上条達に二歩近づいた。

「アイツらは強敵だったさ。俺も傷だらけだ」

喋っている今も傷は疼く。それを聴くとライザーは懐から何かの容器を取り出し、上条に放り投げた。投げられた物は落ちぬように取ってしまうのは上条の貧乏性ゆえ仕方ないことだ。

「これは…なんだ？中に水が入ってる…」

『フェニックスの涙』だ」

その言葉にリアスが、そしてユーベルーナまでも目を見開く。

「ライザー様！なぜフェニックスの涙を人間ごときに!?」

「フェニックスの涙？なんだそれ？」

価値をわからない上条に、怒り気味にユーベルーナが告げる。

「フェニックスの涙はフェニックス家のみが作れる秘薬！いかなる傷をも即座に癒すその力のために魔界でも高値で取り引きされており、レーティングゲームでもその反則級の速度から一試合に二つまでしか使ってはならない、というルールが設定されたほどの超高級回復薬ですわ！

それを敵の、それも人間などになぜ!?」

「理由は三つある」

ライザーは翼で空にゆっくりと浮かびながら、口を開く。
「一つ目は外聞的な理由。俺様がほぼリタイア寸前の傷を負った、悪魔でもなく神滅具を持ったわけでもない人間を燃やし尽くしたと言われれば人聞きが悪い。グレモリー家との仲が拗れるのも困る。グレモリー家も『フェニックスの涙』のお得意様の一つだからな。
二つ目は、交渉的な理由。
リアスやその眷属に『万全の状態なら勝てた』などとゴネられるのも厄介だし、そのせいでもう一戦などとズルズル先送りにされるのも面倒だ。
そして三つ目……それはお前ならわかるだろう？ユーベルーナ」
ハッ、と目を伏せるユーベルーナ。彼女に向かってライザーは続ける。
「俺の眷属は『犠牲（サクリファイス）』戦法が十八番（おはこ）、そう誰かが言っていた。なるほどその通り、俺達は兵士達、時には騎士や戦車、僧侶を生贄にし、味方ごと敵を倒すことを良しとしている。その執行役は俺、俺の妹レイヴェル・フェニックス、そしてお前だ、ユーベルーナ。
それほどまでにお前を信頼している……だが今回はどうだ？
お前以外の全ての駒を取られ、さらにお前は敵女王と相討ち寸前にまで行った。そして『フェニックスの涙』を使用した……」
言われてみれば確かに、ユーベルーナの服には所々に大小様々な穴や切れ目がついている。しかし、その下から現れている肌色に傷や腫れはなく、何かしら回復したのだとも言えそうだ。
「グレモリー眷属は今回が初レーティングゲームのルーキー、そんなチームにこの実質無敗の俺達が。残り二人になるまで追い込まれ。フェニックスの涙を使い。その上で傷だらけの人間を燃やしてなんとか勝利した。そんなのは俺のプライドが許さんと言うのだ！
せめて一つでも挽回しておかなければならない。お前がフェニックスの涙を使用しなければ起きなかったことだ、ユーベルーナ。
……退がれ」
「……はっ、出すぎた真似を致しました」
ユーベルーナの身体が光に包まれていく。先ほどまでよく見た現

象と同じ、リタイアの合図だ。上条は消え行くユーベルーナを見ながら、『フェニックスの涙』を使用するか否か逡巡する。ライザーに視線を送られ、やっと容器の蓋を開けた。左手に涙をかけると、なるほど確かに一瞬で引っかき傷や腫れがなくなり、戦闘前と変わらない肌に戻ってしまった。傷跡を右手で触っても傷が戻ったりはしない。どうやら魔術的に見せかけているだけでなく、本当に回復しているようだ。それを確認した上条は上着を脱ぐと、上半身に涙を全てかける。脇腹の傷はなくなり、背中の痛みも一気に引いた。脱いだ上着を再び着ながら、上条は漏らす。

「すごい回復速度だな……アーシアの神器以上だ」

「え、その話詳しく聞」

「回復したようだな……ならば喰らえっ!!」

リアスの言葉を遮るように、ライザーは炎の塊を上条に飛ばす！レイヴェルの火球より大きく、そして速い！上条は右手でギリギリ炎を受け止める。やはり炎は消えていった。

「なるほど、レイヴェルの言うとおり右手で触れた魔力を打ち消せるというのか。厄介だな。

ではこちらも本気で行くぞ!!」

そう言うとライザーは翼を広げて高く飛び上がる。月と重なったそのタイミングで、ライザーは十個の炎球を繰り出す!!

「こんなもん……」

上条は右手を前に出し、一気に二、三個の炎を打ち消す！その後左のほうから迫ってきている一つを避け、右側から来る炎を消す……とここで。

避けたはずの炎が弧を描き、再び上条に向かって迫って来る！視界の端に映る炎に気づいた上条は慌てて方向転換し、何とか炎に触れる。が、無理な方向変換のせいでバランスを崩し、転倒する！

「喰らえ、魔術師!!」

残り全ての炎が迫ってくる！上条は背を地面につけ、右手を顔の前に持ってくる。顔面以外の火傷は覚悟して、目を瞑る上条。

「……おいおいリアス。これが終わったらすぐに構ってやるってのに、もうちょっと待っててくれよ」
上条が目を開けると、炎は全て消えていた。上条の目の前には黒く禍々しい謎の物体。いや、上条は特訓の中で一度見せてもらったことがある。滅びの魔力だ。
「何よライザー。さっきまで数で有利だったくせに、ちょっとでも不利になると焦っちゃう訳？
この戦いは私の結婚を賭けた戦いよ。なら私だって最後まで戦わせてもらうわ！」
リアス・グレモリーは真紅に染まった髪をかきあげると、ライザーに滅びの魔力を打ち出した。

欠損

リアスが放った滅びの魔力は勢いよく飛び出し、ライザーの懐に入る。ライザーの胸が魔力に触れ、ガリガリと削られていく!!やがて滅びの魔力はライザーの心臓部を穿ち、彼の身体に大きな穴を残して消えていった。

しかしその穴も数秒後には埋まり、服まで元に戻っている。ライザーはそれを見てふふんと笑った。

「君じゃあ無理だ、リアス！君では俺を倒せない！そこの人間でなくっちゃあな！」

言いながらその人間、上条当麻に対しまたも炎の塊を数個飛ばす！上条は右手でどうにか魔力を打ち消すが、この膠着状態に歯噛みする。

「プライドがどうこう言うなら降りてこいよ！こんな一方的なやり方、それこそ名前に傷が付くんじゃないのか!?」

その言葉にライザーは鼻で笑う。

「俺は王だぞ？敵兵士のために前線に王が出て打ち取られたなどと言われれば、それこそ名が崩れ落ちる。

そもそもこうやって戦ってやっているのは、お前を叩き潰すため！お前にチャンスなんぞやらん！まだ俺も触っていないリアスの胸を思い切り揉みやがって！許さん！」

言いながらライザーは炎で鳥を形作る。作られた火の鳥は生きているかのように動き出し、上条に近づき炎を吐き始めた！リアスが滅びの魔力を放つが、鳥達はそれも避けて炎を吐き続ける！

「まずい……避けても避けても次が来てキリがない！」

「私の滅びの魔力も下手をすればトウマに当たってしまう…ライザーの炎と違って滅びの魔力に触れればただではすまない。どうすれば……

そうだわ！」

ここでリアス、火に襲われている上条に向かって突撃を仕掛ける！

「おいおいリアス！俺は君が割り込んだからって攻撃をやめたりしな

いぜ？だいたい君が倒れれば俺の勝ちなんだからな！」
　リアスは至近距離で火の鳥を消しとばすと、上条の両脇を抱える！
「舌を噛まないようにしてちょうだい！……っ～！重い！」
「な、何を……うわぁー!?」

　リアスは上条を抱えたまま急上昇！次々と飛んでくる火を掻い潜りながら、ライザーと同じ高度までたどり着いた！
　上条は下を覗き込む。現在リアスは炎を避けるために屋上から離れており、校舎の上に上条はいなかった。十メートルはあるであろう地面との距離に恐怖を覚える上条だったが、その耳にリアスの声が入ってくる。
「私は眷属を……いえ、あなたを手放したりしないわ！信じて！」
　その言葉に上条の震えが止まった。今の自分がやるべきこと、それは怖がることじゃない。
　右手に力を入れ、拳を固く握る。

「焼け焦げろ、魔術師!!」
　迫る炎の弾幕、その全てをリアスは捌く！それと同時に撃っていた滅びの魔力がライザーの顔面にぶつかった瞬間、リアスは更に上空へ飛ぶ！
「無駄だっ…!?な、いない!?どこに消え……ハッ！」
　気配のする方、上を向いたライザーの視界に入るのは、だんだんと近づいてくる握り拳。それはライザーが何か行動を起こすよりも早く顔面を捉え、そのままライザーを屋上へと叩きつけた!!

　ガン！という重い衝撃音が鳴った後、場は一瞬の静寂に包まれる。それを破ったのはリアスの歓声。
「……やった。倒したわ！私達、ライザーをたお……」
　そしてぼん、という破裂音。先程の重い音とは打って変わった、ギャグのように軽い音。
　そんな音と共に、上条の右手が、『幻想殺し』が宙を舞う。

両手を上に……上条の腕があった場所まで伸ばしたまま笑っているのは、ライザー・フェニックス。彼は上に乗っている上条とリアスを振り落とすと立ち上がる。その顔には怒りが強く見て取れた。
「鼻血を出したのは初めてだ。我が家は涙でさえも貴重なんだ、血なんかはもしかすると破格の値で売れるかもしれんぞ、ハハハハハ!!
お前の腕はその代金だ、人間!!」
「そんな、私のせいでトウマが!!」
高笑いをするライザーを見てリアスはへたり込む。

「あはははッ！」

ライザーは目を見開く。右手を飛ばしたはずの少年が、のたうちまわるでもなく立ち上がり、そして笑い出したのだ。
ライザーの笑いを遮って、人間の少年はただ笑う。嗤う。
あまりの激痛や恐怖に気が狂ったか、とも思うが、違う。
なにかが、おかしい。

右手……そう、右手。ライザー・フェニックスが吹き飛ばした右手、その跡からは莫大な量の血が流れている。まるで決壊したダムのように、とめどなく大量の血液が流れている。

――人間の血液というのは、それほどに。上条の足元に大きな血溜まりを作ってなお、彼が高笑いできるほどに。彼が生きていられるほどに、多かったか？

「おい」
突然少年が呟いた声に、ライザーは肩を震わせた。

少年は言う。
「テメェ。まさか右腕をぶち切った程度で、俺の幻想殺しを潰せるとか思ってたんじゃねえだろうなぁ？」
少年は、心底楽しそうに笑う。
その右腕から流れる血の流れに異常が起きる。まるで邪魔だと言わんばかりに血が左右に分かれる。そしてその中から何か得体の知れない透明なモノが、ゆっくりと形作られていく。
それは人間の腕ではない。
顎。
大きさにして二メートルを超すほどの、巨大に強大な。
竜王（ドラゴンストライク）の顎。

龍

突然現れた龍の頭に、ライザーは思わずたじろぐ。
古来より龍族は巨大な力と恐怖の象徴。天使・悪魔・堕天使が初めて手を結んで戦い、その上で旧魔王を仕留め、全勢力に多大なダメージを及ぼした二天龍。数々の伝説を持ち未だ現役の五大龍王。凶悪な気質を持ち、肉体を滅ぼされ魂を幾重にも刻んで封じないとその存在を抹消できないという邪龍。そして、龍の神と圧倒的なまでの力を持つ存在として恐れられる。
その龍が、人間の肩口から飛び出した。その理由（タネ）をライザーは考える。神器、魔法、もしくは他能力で作られた偽物……
が、思考がまとまるよりも早く、淡く鋭い眼光が彼に狙いを定め、巨大な顎を極限まで大きく開き、ライザーに向かって龍が迫り来る！
「…っ!?舐めるなっ！俺は不死鳥、炎と風と命を操るフェニックス！
右手を切断した際に残っていた搾りかすをいくら濃縮しようと俺には効かん！くたばれ!!」
弩を作り、大きく開いた口の中に炎の槍を放り込むライザー。しかし炎の槍は牙に触れた瞬間に消え失せた。二の矢三の矢とライザーはひたすらに槍を放つが、龍は歯牙にもかけない。ついに龍は間近に迫り、ライザーは観念して翼を広げ、宙に逃げる。首は器用に進行方向を曲げ、ライザーを狙ってひたすらに迫る。
「こちらを狙うのはいいが、自分の守りがお留守だぞ！喰らえ！」
ライザーは龍の頭から逃げながらも再び火球や火の鳥を作り、上条に飛ばす。しかし見えないバリアが張られているかのように、火は上条にある程度近づいた途端弾けるように消えていく。
そして、ついに。
「ぐ、おおおおおおおお!?」
ライザーに龍の頭が追いつき、その顎が閉じられる。とっさに翼を畳み重力を使って避けようとしたライザーだったが、欲を出した。
炎を噴射し攻撃しつつ勢いをつけて逃げようと考え出した左手、そ

れを龍に噛みつかれる。
「っ！……？痛みがない？」
左腕を噛みちぎられた。ライザーは咄嗟に目を瞑る。しかし、先程幻想殺しで殴られた時のような新鮮な感覚はない。いつも通り、身体が軽くなっただけだった。
「ふ、ふはははははは！なんだ驚かせやがって！やはり右腕を失ったことで、右手の威力は落ちている！俺にダメージを与えられないとはな！この立派な見てくれの龍も、追尾性能と見た目だけのお飾り……」
左腕の跡を見て、ライザーは気づく。気づいてしまう。
今まで再生というのは、無意識的に行なっていたことだった。腕をもがれても、顔を抉られても、心臓を穿たれても、そうなったと考えるよりも先に身体が再生していた。
そして現在。
欠けた左腕は、生えてこない。
いつまでも、蘇らない。
空を飛ぶため翼を広げるが、バランスが取れず屋上に落ちる。左右のバランスが保てない。
「……不死鳥の俺が……」
不死鳥の優位性、不死身の身体の性質は無効化された。炎も全て掻き消される。ライザーは自身の中で確定していた勝利の道を、根本からひっくり返された。そういったことは未だかつて、一度たりともありえないことだった。
ありえない可能性。それを作り上げたドラゴン。龍の頭が三度迫ってくるのを見て、ライザーは動けない。
「だ、誰か！助けてくれ！ユーベルーナ!!レイヴェル!!兄貴！親父!!
誰か！誰か」

竜王の顎が不死鳥の上半身をまるごと呑み込んだ。
静まる屋上。その中で固唾を呑み込む音と共に、最後のアナウンスが流れた。
『ライザー様の撃破（テイク）を確認。この勝負、リアス様達「グレモリー眷属」の勝利でございます』

閑話――用務員

「いいですか上条ちゃん！この夏休みの宿題は一学期の復習なので、きちんとやらないといけないのですよ。夏休みが始まって一週間経って宿題を忘れたことに気づいたということは一週間宿題に全く手をつけていないということなのです！こういうものは最終日にまとめてやるのではなく毎日少しずつコツコツとですね……」

フェニックス家との戦いをどうにか制し、上条当麻は再び日常に戻った。そして気がついたのは、夏休みの宿題を全て学校に置いてきているという事だった。職員室に行って鍵を借りる時に小萌先生に見つかり、そして今に至る。上条としては生死の危機でそれどころではなかったが、何もなくても恐らく一週間は遊び呆けていただろうと思ったため、素直に先生の話を聞いておく。

長いように思えたお説教はその実五分ほどで終了し、上条は無事に鍵を借りることができた。小走りで教室に向かう上条を、小萌は見送る。

「夏休みまで生徒が来てくれるなんて羨ましいじゃん、小萌先生」

後ろから声を掛けられる小萌。振り返ると同僚の教師が、用務員室のドアに寄りかかってこちらを見て笑っている。

黄泉川愛穂（よみかわあいほ）。この高校で体育教師を務め、また上条の隣のクラスの担任にも付いている。

「黄泉川先生こそ、卒業しても生徒に頼られるなんて先生冥利に尽きるのです！」

冗談に真面目に返された黄泉川は、誤魔化すように笑って応える。

「それはこのバカ共が浪人してでも教師になるーって泣きついてきたからじゃんよ。男三人と狭い部屋に篭って、むさ苦しいのなんの。プールにでも入りたいじゃんよ」

「事務所から許可をもらったら使えるんじゃないです？指導書の中に書いてあったと思うのです」

その言葉に黄泉川は目を光らせ、用務員室のドアを開き、叫ぶ！

「お前ら、プールに入りたいかーっ！」
少し遅れて、野太い歓声が小萌の耳にも入ってきた。用務員室から、ツナギを着た三人の男がノソノソと現れる。
「この部屋チョー暑いし、一刻も早く飛び込みたい！というかクーラーのついたこっちの部屋で勉強してーんだけど！」
居酒屋の店員のように頭にバンダナを巻いた、青白い顔の少年。名を服部半蔵（はっとりはんぞう）。有名な伊賀忍者と全くの同姓同名だが、本人は親がカッコつけてつけた名前だと言っている。一年浪人。
彼が真っ先に叫ぶと、後ろからくすんだ金髪の少年も続く。
「俺水着とか持ってきて無いんだけど！着衣水泳ってのを授業の一環でやるって聞いたけどそれやっていいですか！」
着衣水泳に挑もうとする少年の名は浜面仕上（はまづらしあげ）。手先が器用で用務員の仕事に最も向いているが、よく女子のスカートの生足を鼻の下を伸ばして見ているため、用務員としての人気はダントツで低い（他の二人はバレないように見ている）。一年浪人。
ジェスチャーでクロールをする浜面に対し、最後に部屋から出てきた男がニヤニヤ笑いながら言う。
「……こういう暑い日に、気分屋の黄泉川だ。こんな状況になるのは予想済み……俺はちゃんと水着を持ってきてる……」
巨漢に厳つい顔をした男、名を駒場利徳（こまばりとく）。高校の体育教師を目指す他二人に対し、一人だけ小学校教師を目指しているため、ロリコン疑惑が浮上している。他二人より一歳年上で二浪中。
「ちなみに俺も持ってきている。ボクサーパンツ一丁で飛び込むのはお前だけだぞ浜面！」
「ちょ、そういう流れなら言ってくれよ！俺水着とか持ってないし！高校の水着はダサかったから捨てたしー！」
その言葉を聞いた黄泉川は浜面に言い放つ。
「ダサい、か。せっかく学校の水着をレンタルしてやろうかと思ったが、ダサいのなら仕方ない。お前はカッコいいパンツでプールに入るじゃん」
「待てーっ！待ってください！今一度俺にチャンスを！ダサいっての

は取り消すから、俺にも水着を！ギブミーミズーギ！」
土下座して頼む浜面。それを見て笑う半蔵・駒場と黄泉川。それを見て小萌も微笑むのだった。

～～～～～～～

「だー、疲れたー！」
プールで遊んだ後、その分を取り返すように熱血指導をされた浜面は心身ともに疲労困憊のまま寝床であるマンションに帰りつく。物置に荷物を投げ混むと服を全部取っ払い、冷たい水のシャワーを全身に浴びた。風呂場から出ると部屋着を着て、敷きっぱなしの布団に横になる。黄泉川から読め、と貸してもらった小説を二ページ読んで、閉じた。もうすぐプロローグは読み終わりそうだ。
大量の漫画とエロ本の中に申し訳なさそうに参考書が置いてある本棚に小説を直すと、そのタイミングでドアがノックされる。ドアを開けると、甚平を着た前髪だけをブロンドにした黒髪の男が立っていた。彼は浜面のお隣さんである。外国人で、日本の文化を嗜む為にこちらに住んでいるらしい。
「よう兄ちゃん、話題のゲームを買ってみたんだけど途中で詰まっちゃってよ、教えてくれねぇか」
彼は趣味によく浜面を誘う。食事なんかも一緒に奢ってくれることが多いため暇な時は浜面もよく付き合っているのだが、今日はとにかく疲れたし、眠い。
「あー、今日は無理だ。ヘロヘロでさ。明日は一日休みだから、いくらでも付き合ってやるよ」
「お、そうか。悪りぃな」
彼は胸の裾から手を振ると、こちらに背を向け隣の部屋にゆっくり歩いてく。浜面はその背中に向かって一言、告げる。
「明日の昼にでもそっちに行くから、軽いメシでも用意してくれよ、アザゼルのおっさん！」

剣

夜は悪魔にとって、もっとも活動しやすい時間である。太陽の光を浴びないために悪魔の力を最大限に発揮でき、さらに暗闇で人目がつきにくいので多少の飛行や超速移動ではまず一般人にはバレないのだ。雨だと視界が悪くなり、なおのことバレにくい。

七月二九日。少し生温い雨の中でグレモリー眷属の騎士（ナイト）、木場祐斗（きばゆうと）は街の見回りを行なっていた。駒王町はリアスの人間界での領地であり、その安全を確保するのもグレモリー眷属の務めだ。はぐれ悪魔や堕天使を見つけることも多々あり、つい先日起きた堕天使による事件も、このパトロールのお陰で先手を打つことができた。効果は確実に出ている。

木場が高速で地面を走っていると、頬にチリっと痛みが走る。その部分を触ると、火傷をしたように腫れている。炎か光の攻撃を食らった、と木場は気づき、前を凝視する。

五十メートルほど離れているだろうか、木々に囲まれた自然公園の中に人が立っているのが見える。黒を基調にした服装に、胸で踊る十字架。十字教の神父だ。

木場は神父が大嫌いだった。しかし攻撃されたからといって即座に反撃するほど単純でもない。十字教の戦士が数人、駒王町に滞在していることは知っている。彼もその一人で、はぐれ悪魔狩りでもしていたのだろう。そう考えた。

はぐれ悪魔とは王から逃げ自由気ままに暮らす悪魔であり、平気で人を喰らったりする。悪魔側も十字教側も狩るべき相手なのだ。

しかし木場は当然、はぐれ悪魔ではない。グレモリー眷属の騎士である。それを説明するために、木場は足に力を込めて公園に突っ込む。五十メートルなど木場にとっては一歩と同義だ。木場は一瞬で神父の背後に立ち、声をかける。

「夜分遅くにすみません。僕ははぐれ悪魔ではなく――」

「ひ、ひぃぃぃぃぃぃぃ!!?」

裏返った悲鳴とともに、神父が振り向きざま銃を連射する。木場は

真上に跳ぶと同時に剣を創造した。話にならないのなら、切っていい相手だ。創った剣から神父に視界を戻す。

神父の腹に、血が滲んでいた。

神父自身も遅れて腹を見る。その目が驚愕に開いた瞬間、彼は血反吐を吐いてその場に倒れ伏した。

(誰かにやられたのか?誰だ……っ!)

一瞬強く感じた異常な殺気!木場はすぐに剣を構え、後ろに振るう。

ギィイン!と剣が何かにぶつかり震え、火花が散った。

木場の剣とぶつかったのは、西洋風の長剣。そしてそれを振るうのは、先程倒れた男と同じ姿。神父だ。

木場は、この神父を見たことがあった。つい先日、教会で彼と剣と交えた。

「んー?この場は見学なしにしなきゃいけないんで、楽にバイバイさせたげようと思ったんだけど。よく見たらあん時の悪魔ちゃん!僕ちんに殺されに来てくれたんですかぁ~!?」

フリード・セルゼン。堕天使騒動の時に一人だけ身柄を確保し損ねていたが、まだこの街に潜んでいたとは。木場は心の底にふつふつと湧いてくる黒い感情を自覚していた。

「……まだこの町に潜伏していたようだね?しかし君は悪魔祓い(エクソシスト)ではなかったのかな?同種である神父狩りを始めるなんて、落ちたものだね」

言いながらフリードの腹を蹴飛ばそうとするが、フリードはそれを察知して後ろに下がった。木場はその隙に魔剣を両手持ちから右手だけにシフトし、左手にも魔剣を創ろうとした。がその時、フリードの振るっていた長剣が眩い光を放ち始める。

「……ッ!?その光!その聖なるオーラ!その輝きは!!」

木場の剣を握る力が俄然強くなる。いつも穏やかな笑みを浮かべる顔は鬼気迫った表情に染まり、射殺すような視線をフリードに、いや、剣に向けた。

「この剣〜？・いいでしょ！・僕ちんの宝物！・お前さんの作り物の魔剣とは比べ物にならないほどの、ちょ〜強い伝説の剣！・
その名もエクスカリバー!!・約束されたほにゃららの剣でございまするよ、ええ！・かっちょいいでしょ！・」
剣を天に掲げ口を裂けそうなほど広げたフリードの身体が、ブレた。木場にはそう見えた。

いつのまにか、フリードは視界から消えていた。遅れて背中に痛みが走る。焼け焦げたような、いつまでも引かない痛みだ。斬られたのだと頭で理解した。
（さっきまで前にいた僕の背中を!?・瞬間移動か!?）
驚く木場をフリードは嘲笑い、暴言を飛ばす！・
「遅ぇ遅ぇ遅ぇ!!・集団でつるんでなきゃこんなもんですかぁ!?・それならもう狩っちゃいますよぉぉぉぉぉぉ!!・」
フリードの身体が再び歪み、消える。木場は咄嗟に空を飛んで避ける！・が、それでも左足の脛に痛みが走った。
「にひひ、どーよ。悪魔ちゃん？・何も分からずただただ殺されてく感覚はよーっ!?・」
三度、フリードが仕掛けてくる！・木場はとっさにとある剣を創り出した！
「つづ、あああああああ！・」
創ったのは巨大な剣、その効果は振動。木場は強く震える刀身を勢いよく地面に突き刺した！・突き刺した衝撃と剣の振動で、巨大な地震が起きたように地面が激しく揺れる！・
「おっ、とっとっとっ!?・どわぁぁぁぁぁ!?・」
そして、いつのまにか木場との距離を後僅かまでに詰めていたフリードも急な揺れに勢いよく地面を転がる。木場の身体を追い越し、森の中へと入っていった。
「なるほど、瞬間移動ではなく僕達『騎士』と同じように超スピードで動いていたってわけか。それはエクスカリバーの特性の一つ……『天閃（ラピッドリィ）』だね。

タネは割れた。このまま続けるかい？」
少しの沈黙が森に訪れる。それを破ったのは、はち切れんばかりの笑い声。
「ヒャハハハハハハハハハハハ!!いいさ。今回は見逃してやる！次はこのかっぴょいいエクスカリバーちゃんをもっともっと増やしてお前の両手両足全部ぶった切ってエクスカリバーで串焼きにしてやるよ!!」

別れ際に飛んできた光の弾を全て弾き飛ばし、周囲に気配がなくなったのを確認した木場は、ついに地面に膝をついた。地面に突き刺した芝のチクチクした痛みも、今は感じない。剣の柄を握る力も失い、木場はその場に倒れこんだ。

夜の公園には神父の遺体もすでになく、ただ木場だけが雨に打たれていた。

～～～～～～～

「……不幸だ。いやこうなる可能性は薄々あったけれども」
もはや日課となった朝イチのランニングをするために、上条は今日も外に出ていた。高校の体操服ではかっこ悪いと少し贅沢して（上条基準）買ったスポーツウェアは、家を出て数分後に泥を被ることになった。これが数秒後なら戻ってすぐ洗えば汚れが落ちる可能性もあるが、そこそこ遠くに来てしまい、そして天気は快晴。帰る頃には泥も無事に服の一部となっているだろう。
かかった泥に涙目になりつつ、少しでも汚れを落とすために上条はランニングコースの途中にある自然公園に立ち寄った。水道で服を洗うだけのつもりだった。
「……、？」
最初に気づいた違和感は、妙な地面の隆起だった。どこかを中心として円を描くように、土が盛り上がっているのを上条は見つけた。

次に見つけたのは、ひび割れ。
その円の中の地面が、干からびた大地のようにひび割れているのに上条は気づいた。
上条は円の中、木々が集まる方へと足を運んだ。ぞわり、と嫌な予感が這い上がってくる。それは、とある臭いを嗅いだからだ。
肉が腐った臭い。常人が受け付けない、不愉快な刺激臭が、上条の鼻に入ってくる。
上条は木々への入り口を眺める。
もうすぐ顔を出そうという朝日は木々の中にまではこの時間帯には入っていかない。まるで洞窟の入り口めいた道の先には、ちょっと覗き込んだくらいでは何も見えなかった。
上条は、進む。木々を時折掻き分けながら、奥へ奥へと入っていく。
そして、目撃した。
木陰に倒れる、騎士（センパイ）の姿を。

出会い

「……っづ……」

「あっ、起きられましたか！痛みますか！あまり動かないでください！」

女の声が聞こえた木場は、うっすらと目を開ける。視界に写ったのはシスターの服装。

木場は剣を作り出そうとするが、上げた右腕に痛みが走る。その右腕を押さえたのは、やはりシスターの女だった。

長く伸びた金髪に濁り一つない翠眼、整った顔立ち。木場はこのシスターと出会ったことがある。堕天使との揉め事の後も、不死鳥との戦いの後も、上条当麻を自宅に送り届ける際に彼女と出会っていた。この間の不死鳥対策の合宿の際には、食事を作ってくれた人だ。

「アーシア・アルジェント、か。ということはここはトウマくんの家……どうして僕はここに？」

「それはとーまさんが…あっ、とーまさん！木場さんが起きましたよ！」

言葉につられてこの家の家主、上条当麻がやってきた。彼の表情はどこかホッとしたような心情と不安が入り混じっているようだった。

「起きましたか、木場先輩！よかった…簡単なご飯作ったんで、食べてください！」

言われながら目の前にずずいと出されたのは、素麺とおつゆ。木場はそれを床に置くと、どうにか細長い刃のついていない棒のような剣を作り出す。それを支えにして、立ち上がった。

驚いたのは上条とアーシアである。二人は木場を寝かせようと宥める。

「木場先輩！病み上がりなんだから寝ててくれ！今真夏の外なんて歩いたら、水分不足でぶっ倒れちまう！」

「そうです！木場さんはだいぶ血液が減っています！無理に動かれると下手をすれば取り返しのつかないことに…」

木場を宥めようとする二人の手を、彼は強引に振りほどいた。その

後木場はハッ、とした表情になり、布団の上に座り込む。
「ごめん…気が立っていた。確かに君達の言う通りだ。今日はここで休むよ」
「……！今日だけと言わず、何日でも泊まってください！……ついでに宿題を教えてくれたりしたら上条さんは感謝感激なのですが……」
「……ふふっ。いいよ、一年生の問題なら僕も楽に解けるだろうし」
「やったー！お世話になります！」
重い空気が和らぎ、ホッとする上条。小さな机を木場が寝ていた布団の近くに持ってきて、そのまま三人で素麺を囲む。木場も美味しそうに素麺を啜っていたが、時折その表情が思案顔になるのを上条とアーシアは見た。
一服して素麺の後片付けをし、残った麺を味噌汁に入れるかサラダにするかを考えていた上条の耳に、インターホンの音が聞こえてくる。木場とアーシアに断ってから、上条は玄関の戸を開け外に出た。
外にいたのは茶髪の男子。上条と同じ高校生くらいに見えるが、背が少し高く年上のようなイメージを受けた。着ている服装は涼しげで質素なものだが、胸につけたネックレスが目立つ。
ネックレスの先端についているのは、十字架。それも、土御門がつけているものと酷似していた。
「えーっと、どちら様で？」
聞く上条に男子はニッコリと笑い返し、こう言った。
「俺は兵藤一誠！イギリスから来たんだ！アーシア・アルジェントと話がしたい！」

使者

駒王学園旧校舎、オカルト研究部室。リアス・グレモリーの根城に今、二人の女が乗り込んでいた。栗毛をツインテールにまとめている女に、短髪の青髪に緑のメッシュを一筋入れた女。どちらも若々しく高校生のように見える。

栗毛の女が真剣な面持ちで口を開く。

「私はローマ正教の紫藤イリナ、こっちはフランス聖教のゼノヴィアです。以後、お見知り置きを」

「ローマ正教…イギリス・ロシアと並ぶ十字教三大勢力の一角がどうしてわざわざこんな東方の島国に？名前からしてあなたは日本人かハーフのようだけれど……」

上座に座るリアスはゆっくりと脚を組み替えながら、彼女らにここに来た理由を問うた。対して栗毛…イリナの目が細まる。

「先日、我々十字教の各派閥に置いて保管、管理されていた聖剣エクスカリバーのうち三本が奪われました」

「……？エクスカリバー三本？聖剣ってのは大体一本なんじゃ？」

「あらあら、美琴ちゃんはエクスカリバーの話をしていなかったですわね」

御坂の疑問に、その側についていた朱乃が答える。

「エクスカリバーは大昔の戦争で四散してしまったのですが、折れた刃の破片を集め、錬金術によって七本の新たな聖剣として生まれ変わったのですわ」

「その代わり性能は落ちてしまったが、ね」

先程までだんまりを決めていたもう一人の少女……ゼノヴィアが、背に抱えていた巨大な物体の封を解く。

そこから溢れてくるのは、悪魔にとっては禍々しいほどの聖のオーラ。御坂はブワッ、と全身から汗が流れるのを感じた。

「これは『破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）』。七つに分かれた聖剣の一つだよ。我々フランスが管理している」

ゼノヴィアはそれだけ言うと、再びエクスカリバーを布で覆う。よ

く見るとその布にも呪術的な文字列が並んでいた。普段はその布によって封印されているのだと御坂はわかった。
「そしてこちらにもう一本！」
イリナが懐から長い紐のようなものを取り出す。それはうねうねと独りでに動き出し、やがて一本の刀へ姿を変えた。
「私の方は『擬態（エクスカリバー・ミミック）の聖剣』。こんな風にカタチを自由自在にできるから、持ち運びにすっごく便利なんです。こちらは私達ローマ正教が所持しているのです！」
少し自慢げに鼻を鳴らすイリナ。彼女にリアスが苦言を呈す。
「こちらは悪魔になって年若い者が多くいるの、できればいきなり聖剣を取り出すのはやめてほしいものね」
その言葉にハッとしイリナは剣を元の紐状に戻すと、エへへと頬をかいた。
「……それで、奪われたエクスカリバーがこんな極東の島国の、一地方都市とどう関係があるのかしら？」
淡々と話すリアス。それに対しゼノヴィアが口を開く。
「エクスカリバーはイギリスに二本、ローマに二本、ロシアに二本……あったが特例でロシアとフランスで一本ずつ。残りの一本は先の大戦で何処かに消えてしまい行方不明となった。
そのうち、イギリスとローマのエクスカリバー一本ずつ、そしてロシアのエクスカリバーが奪われた。奪った連中は日本に逃れ、そしてこの地に持ち込んだという」
リアスは額に手を当て息を吐く。最近この領地はこういったトラブル続きだ。
「エクスカリバーを奪った者に検討は？」
問いにゼノヴィアは目を細める。
「奪ったのは『神の子を見張る者（グリゴリ）』。堕天使の群れだ」
言葉にリアスは目を見開いた。
「堕天使の組織に聖剣を奪われたの？失態どころではないわね。でも確かに、奪うとしたら堕天使くらいだわ。上の悪魔にとって聖剣は興味の薄いものだもの」

「奪った連中は把握している。グリゴリの幹部、コカビエルだ」
「コカビエル……古の戦いで生き残った、堕天使の幹部じゃない！聖書にも記された者の名前が出てくるとはね」
　リアスも流石に大物の登場に冷や汗をかいた。ゼノヴィアもため息をつく。
「上も大した任務を押し付けてくれるよ……先日からこの町に神父――エクソシストを秘密裏に潜り込ませていたんだが、ことごとく始末されている。おそらくコカビエル陣営の者による犯行だ」
「なるほど。異種狩りの専門家、エクソシストが根こそぎやられた原因は確かにコカビエル……もしくは、エクスカリバーの力でしょうね」
　ゼノヴィアは話を終えたとでも言うように、出された紅茶と茶菓子に手をつける。それを見て横のイリナがハッキリと言う。
「そこで私達はあなた方に依頼……いや、注文しておきます。今回起きているのは私達教会と堕天使のエクスカリバー争奪戦。それにこの町の悪魔が一切介入してこないことです」
「つまり、そちらに今回の事件に関わるな、と言いにきた」
「えっ……私達に協力しろと言いに来たんじゃ……？」
　疑問に感じ、口に出す御坂。その言葉にゼノヴィアが答える。
「私達教会は君達悪魔の事も多少疑っている。もしや堕天使と協力しているのではないか、とね。聖剣を教会側から取り払うことができれば、悪魔も万々歳だろう？堕天使と同様利益はある。それ故に手を組んでいてもおかしくない……上はそういう考えのようだ」
　その言葉を聞いて反論しようとする御坂。しかしそれを朱乃が抑える。朱乃はリアスを見た。イリナとゼノヴィアも、彼女に視線を戻す。
「……」
　リアス・グレモリーは困り顔だ。精悍な顔つきがこの話で崩れた事にイリナは驚いた。
「……結論から言うと、私達グレモリー眷属はそちらの戦いに手を出すことはないわ。魔王の妹として、そしてこの地を守る領主として約

束してもいい。
――ただし、おそらく私の眷属はすでにこの事件に関わってしまっている」
イリナの表情が驚きに変わる。リアスは朱乃とこ猫の間に空いた間を見た。
「今日ここにいない私の眷属の一人、木場祐斗。彼はエクスカリバーに対し、並ならぬ『憎しみ』がある――」

〜〜〜〜〜〜〜

一方その頃上条家。ここには教会の者が三人、集っていた。
上条家の居候、アーシア・アルジェント。現在は駒王町の監察任務を任されている。彼女の側にはこの家の現家主、上条当麻も侍っている。
駒王学園の高校に通う教会の戦士、土御門元春。現在は堕天使側への諜報活動を行なっている。
そして、イギリスからやってきた少年、兵藤一誠。彼は今日ここに来た理由をその場にいる者達に伝えた。
「いやー。しかし今日この場に、グレモリー眷属の悪魔がいるなんて運がいいぜ。一応王のリアス・グレモリーのところには人を寄越しているんだけど、末端にも知らせておいた方が全体に行き渡りやすいだろうし……」
エクスカリバー奪還作戦について喋り終えた一誠はホッと一息つく。その胸ぐらを掴む者がいた。
「……なんだよ？末端って言われて怒ったか？悪い、そう言う意味で言った訳じゃ……」
「三本のエクスカリバー、それに僕達が関わるな、だって？

ふざけるな!!」
木場は一誠を床に叩きつける。一誠は受け身を取りながら木の板を転がった。
「エクスカリバー……あれは絶対に僕が破壊する！破壊しなければな

らないんだ！それを邪魔するようなら、教会の人間だって容赦はしない！」
木場は空中に手をかざす！彼の右手から、鉄の刀が顕現する！
と、同時に。
木場の体幹がふらりとブレた。彼はそのまま床に倒れこむ。それを見て一誠は、安心したように太い息を吐いた。
「センキューな、助かったよ……土御門」
上条がそちらを振り向く。土御門元春は床に小さな箱を置き、何かの呪文を唱えていたようだ。それが終わると彼も小さく息を吐いた。
「やはりこうなるか……木場祐斗。こいつの因縁と怨念は相当に深いようだ」
「因縁…？土御門、木場先輩について何か知ってるのか……？」
「ああ、そうだ。この機会だ、お前達に話しておく」
土御門はズレたサングラスをかけ直しながら、ゆっくりと口を開いた――

結成

エクスカリバー。限られた者にしか振れないという伝説の聖剣。それを誰にでも扱えるようにする計画が十字教内に存在した。聖剣計画と呼ばれたそれに選ばれた年若い少年少女は、しかし聖剣に選ばれることはなく、失望した教会関係者により秘密裏に『処分』された。『聖剣に適応できなかった』…それだけの理由で。

ある日集められた部屋。子供では届かない高所に窓があるだけの部屋。そこに被験者達は集められ、毒ガスの餌食となった。被験者が一人、また一人と死んでいく中、彼らは一人の少年に生きる希望を託し、彼を逃した。

それが木場祐斗。故に彼は聖剣を憎む。仲間を殺した聖剣を。

「とまぁそんな感じだにゃー。つまり木場きゅん先輩は聖剣計画とやらに仲間を殺され自分も殺されかけたから、聖剣をめちゃくちゃ憎んでるんですたい」

上条はその計画を聞き、木場を見る。いつもの温厚な人柄が、エクスカリバーの話を聞いてからは全くと言っていいほど崩れ、荒れていた木場。その気持ちが、その怒りが少しでも感じられた気がした。

「……うぉおおお！何て酷い話だ！木場、お前も大変だったんだなぁ！」

そして隣では、教会の戦士兵藤一誠が木場を思い男泣きしていた。

「…木場とエクスカリバーの因縁はわかった！確かに何も関わるな、というのは酷だった！木場も聖剣奪還計画の一員に加える！」

「それはいい判断だぜぃ！木場は聖剣の対極……魔剣を創り出す『魔剣創造（ソード・バース）』、いてくれるだけでかなり強力なサポートになり得る。さらに木場自身も強力な騎士だ。これで俺も少しは楽できるにゃー」

ニヤリと笑う土御門。彼のサングラスに隠された目線は、横にいる人物に向けられていた。上条当麻。彼もまた今の話を聞き、その拳を握った。

「俺も…俺も、聖剣奪還の手助けがしたい！木場先輩の手助けがした

い！俺にも協力させてください！」
　聞いた一誠は笑う。
「よく言ってくれた！お前も男だ、上条！
　アーシアや土御門から話は聞いてる！お前の右手も頼りにさせてもらうぜ！」
　こうしてここに、野郎達の聖剣奪還チームが結成されたのだった。

　一方駒王学園旧校舎近く。
「あんな話を聞いて、動かない訳にはいきません。まずは木場先輩の行方を探しましょう。並行してコカビエルの情報も探れればなおよし、です」
「臭いを辿って探すって猫ってより犬みたいですね、あはは……ごめんなさい」
　駒王の若い芽達も、こっそりと行動を開始した。そして。

「この絵が日本の十字教の使徒の絵!?やっぱりＣＨＯＮＭＡＧＥが生えてるのね！それでも神々しさはどことなく伝わるわ……でもやっぱり高いわ！買えない……」
「そんなお姉さんに朗報なのよな！今なら使徒生誕から大体四〇〇年記念（諸説あり）でお値段なんと半額！そして隠れ十字教会参拝一回につき一ポイント貯まる隠れ宗教ポイントをどどんと一〇ポイントプレゼント！さらにさらに今ならなんと！大天使様になりきれる『大天使ブカメイド』セットも付いてくるのよな！」
「買ったあ！これはもう買うしかないわ！でもお金が足りない！ゼノヴィア、ちょっと貸して！」
「ん？あぁ、少しくらいなら構わんが……っておい！法皇猊下からもらった路銀をほぼ全部使ってるじゃないか!?こんなのダメに決まってるだろう！返金だ返金!!……っていない!?あの店主どこに行った!?」
「ああ、いい買い物をしたわ……主よ、この巡り合わせに感謝いたします。アーメン」

「アーメンじゃない!!イリナ!お前も店主を探せ!まだ近くにいるはずだ!」

合流

「木場と協力するには、俺がいない方がいいだろうな」
そう言って離れる一誠と、非常時にも連絡が取れるように連絡先を交換して、別れた。しばらくすると木場が起き上がる。殺意のこもった目が周囲を見渡すが、その対象となる一誠はもういない。
「おはようだにゃー木場きゅん先輩、実はあの後俺達の必死の説得のお陰でエクスカリバー奪還作戦に加えてもらえることになったんだぜぃ！なぁ上やん」
「えっ!?…あ、あぁ、そうなんですよ木場先輩！イッセーさんからの伝言を携帯で録音してますんで、今流します！」

『テステス、あー、あー。おはよう、木場。お前の話は聞いた。聞いてしまった。本当に申し訳ないと思って…』
そう言った時、上条当麻の携帯が縦に真っ二つとなった。
「……え?ええ!?俺の携帯がぁ!?」
叫ばれてハッ、となる木場。彼は少しばかりバツが悪そうな顔をしたが、すぐに表情を変え土御門を睨む。
「ツッチー君……いや、土御門君。彼に僕の過去を話したね」
「そうでもしないと教会側からの許可が降りなそうだったからにゃー。苦肉の策ってやつだぜぃ」
木場の手元に小さなナイフが創られる。
「彼は、どうだった?僕の過去を聞いて、どうだったんだい?」
土御門は口元に笑みを浮かべながら、軽く言う。
「アイツは大泣きだったぜぃ。元から感受性と正義感が強くて、情に絆されやすいやつだ。
聞いた上で、お前のエクスカリバーに対する執念や恨みを知った上で、お前の作戦参加を許可した。それが全てだにゃー」
木場はその言葉にしばし黙り…そして、小さく笑んだ。
「……ありがとう、と言っておいてほしい。彼が僕の知っている教会の人間とは違うのは、接していてわかってた。それでもあの態度を続

けた非礼も、詫びてほしい」
「直接自分で言えばいいんじゃないかにゃー？」
「心で彼らの優しさをわかっていても、僕の奥底にある復讐心はきっと彼らを許せない…今はこうして彼に感謝をしているし、謝りたいと思っているけど、実際彼が目の前にいるときに、僕が襲いかかろうとしないかは別の話だよ。
だから、君が伝えておいてくれないか。僕は個人で動くとするよ」
そういうと、木場は立ち上がる。それを引き留めようとする上条を、土御門が制した。
「木場の身体にはちょっとした魔術をかけた。どこにいるか、そしてその健康状態を知るという魔術師の親が子供にかける初歩的な魔術だ。これさえあれば木場の行動はある程度読める。
さて、こちらはイッセーと合流だ。本格的にエクスカリバー、および堕天使コカビエルの捜索を開始する」
「合流場所は駅前の噴水だったよな…木場先輩と一緒にいけないのは残念だけど、言っててもしかたがない。行くか！」
木場と別れ、イッセーと合流するため移動した二人。彼らが最初に見たのは。

「えー、迷える子羊にお恵みをー」
「どうか、天の父に変わって哀れな私達にお慈悲をぉぉぉ！」
駅前で箱を持って立ち、周囲から奇異な視線を受けた二人の少女だった。

～～～～～～～

「んー、美味しい！」「うむ、おかわり」
上条当麻はファミレスにて、一人頭を抱えていた。
「ヒデヨさんが一枚、二枚……あぁ、それを頼むと三枚……！」
「いやー、奢ってやるなんて上やんは太っ腹だにゃー！」
「うるせー！お前も払え土御門！」

「ごめーん、俺今日財布持ってきてないんだにゃー。あ、店員さんついでにポテト大盛り一つ！」
「てめぇ追加してんじゃねぇ！」

……騒がしい食事は三十分ほどで終わった。上条はその間にドリンクバーを頼み、土御門に調合品を試させたりしていたが、食事が終わったのを見て席に着いた。
「イッセーさんが話していた、派遣されてきた教会の戦士っていうのはあんた達だろ？」
その言葉にイリナが素早く頷く。
「ええ、私とゼノヴィアは確かに教会の戦士よ！それで、あなたは？ツチミカドと仲がいいようだけど、戦士という言葉まで知っている以上、こちら側の人間よね？」
彼女の問いに、横でアイスコーヒーと青汁をブレンドした飲み物を口に運んでいた土御門が代わりに答える。
「こいつは上条当麻。アーシア・アルジェントの保護者ですたい。この街の堕天使討伐作戦でも助力を受け、成果を出した。よって、今回の聖剣奪還任務にも加えることにした」
少女二人は目を丸くする。
「正気か、ツチミカド。見たところコイツはただの一般人、相手は聖書にも載った堕天使だぞ。無謀だ、一瞬で消し炭にされるのがオチだぞ」
「チッチッチ…甘いぜぃゼノヴィア。それはコイツの神器を見てから言うんだ…ぜぃ！」
言葉とともに、土御門から上条に向かって光の弾丸が飛んでくる！
上条は目を剥きながらも、咄嗟に右手を前に出した！弾は右手に触れると、ヒビ割れるような音とともに消滅した。
「とこのように、上条当麻には光攻撃を無効化する神器が…」
上条は澄まし顔の土御門の腹に、パンチをお見舞いした。